# 岩井基樹の著書「 熊のことは熊に訊け」について

平成２７年２月２６日
国土政策研究会
会長　岩井國臣

## 目次

熊のことは熊に訊け（その１はじめに）

「熊のことは熊に訊け」（岩井基樹、２０１０年、つり人社）から私の注目する記事を、私のコメントを少し織り交ぜながら、これから逐次紹介していきたいと思います。

梅原猛の「人類哲学序説」（岩波新書）、この本は、草木国土悉皆成仏という天台本覚思想に着眼した新たな哲学を提唱した本で、その洞察力はさすが梅原猛であると思います。梅原猛が指摘するように、２１世紀のこれから向かうべき世界文明は、生きとし生けるものすべての命を大事にする文明でなければならないのではないでしょうか。その ためには、思想的に成熟した天台本覚思想とその根拠である法華経に基づく人類哲学が必要であ

るかと存じます。法華経は、生きとし生けるものすべてが成仏できるといっております。天台本覚思想は、法華経のそういう教えを引き継いだものであります。そういう教えを説いた法華経については、私の書いた詳しい解説書があるので是非それを読ん ていただきたい。
http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hokerei.pdf

草木国土も成仏できるとはどういうことか？　私たち人間はもちろんのこと、草木国土もすべてが宇宙の真理というか宇宙の原理に基づいて存在しているわけですね。私たち人間は、これから宇宙の原理というものを明 らかにして、その原理から外れない生き方をしなければならないのではないでしょうか。 人間以外の生きとし生けるものは、無心にただひたすら命を大事にして生きている。また、国土という命を持たないものも、宇宙の原理に基づいて存在している のであるから、もし人間も宇宙の原理にしたがって生きていくのであれば、草木国土といえど、大事にしなければならないのは当然のことであろうかと存じます。

北海道はもとより、内地でも熊とのトラブルが後を絶ちませんが、熊との共存の道を探らなければならないと考えます。そのために活動する私の長男・岩井基樹の活動は素晴らしい。現在、北海道では、岩井基樹は１０人ほどの仲間と一緒に「社団法人・羆塾ひぐまじゅく」を立ち上げて、「ひぐまとの共生」「自然との共生」をモットーに、「ベアードッグ」を使った現実的な対策と取り組んでいます。しかし、その組織は社団法人ですので、会員が増えないと組織維持ができません。そこで、皆さんにお願いする訳ですが、是非、会員になって「社団法人・羆塾ひぐまじゅく」をサポートしてやっていただきたい。私からの心からのお願いであります。

上で述べたように、 ２１世紀のこれから向かうべき世界文明は、生きとし生けるものすべての命を大事にする文明でなければならないと思います。「ひぐまとの共生」「自然との共生」はこれからのきわめて大事な課題だと思います。このような思想が国民の共通認識になっていけば、国民の間のいわゆる格差問題は徐々に無くなっていくものと思われます。強いものだけが勝ち残るというような社会から一日も早く決別したいものです。再度繰り返しますが、みなさん、是非、会員になって「社団法人・羆塾ひぐまじゅく」をサポートしてやっていただきたい。私からの心からのお願いであります。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２わが人生）

ウィルダネスの響きに誘われてめざしたアラスカの原野。
ラストフロンティアの森には、学び、生きる上での全てが在った。
傍らに置いたキャンドルの炎が今にも闇に吸い込まれていきそうな静寂の夜、
恐ろしいほどの底のない孤独とともに森に同化する我を感じ、
暖かな安堵を自らの内に感じ取った。

国家、国境という取り決めに迫られ構えた日本の拠点、北海道・北大雪。
そこは、古参のきこりが「熊の巣」と呼ぶ深く険しい谷だった。
山中の風倒木を人力で引き出し、独り黙々建てたログキャビン。
アラスカへの鋭気を養うはずのこの場所で、山から目線で人を眺めた。

風雲が怪しく向きを変えたのは、丸太を刻む作業の真っ只中。
私を待ちかねたように、この地で始まった野生動物の駆逐劇。
容赦なく殴打（おうだ）され動かなくなるキタキツネ、
生身の粗大ゴミのように運ばれるエゾシカ、
そして、野次馬の笑い声の中で銃弾を撃ち込まれ息絶えるヒグマ。
夏の終わり、心に凍るような風が吹いた。
野生動物の尊厳はかけらもなく、何かが根本的に狂って見えた。

さらばウィルダネス。
命と魂を繋いだ恩ある森と河の風景を飄然（ひょうぜん）と見送りながら、
ヒグマとヒトの軋轢の渦中に身を投じた。
行く手は彼方、北海道におけるヒグマとヒトの共存。
道は一筋、ただそこに続いていた。

以上の通り、岩井基樹は、野生動物の尊厳を守るために、ヒグマとヒトとの共存を目指し、北海道で自分の人生を生きることを決意した。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３安全距離を教える）

車が衝突事故に遭わないために安全距離というものがある。それと同じように、ヒグマとヒトが衝突事故に遭わないために、安全距離というものの概念が重要で、岩井基樹はそのことについて次のように述べている。

山でフキを食べたり、樹に登ったり、水浴びをしたり、雪の斜面を滑って遊んだり。ヒグマはいろいろな表情を見せる。中には、私の存在を確認しつつ、一定の距離を保ってフキを食べ続ける個体もある。そういう個体には、私もただ穏やかに、面白がって眺めていたい。フキを食いたければ食いたいだけ食わせてやり、私は少し離れたところからその姿を

しばらく眺めて、ただそこをそっと立ち去れば良いだけのことだ。（中略）多くのヒトはヒグマをその目で捉えたいと思っている。安全な距離、安全なシチュエーション、しかしできるだけ近くから眺めてみたいと思っている。道内組も遠征組も。そしてその人たちの多くは、いろいろな情報からヒグマに対し恐怖のイメージを持ちつつ、そのイメージにどこか疑いを抱いているのだ。
この人たちにごくごく普通のヒグマの一面を見てもらいたい。そう願う気持ちと、現在のヒトの状態から迫られる過剰な追い払い。このギャップにどうしても葛藤が生じてしまう。本当の追い払いを必要とするのは、一定の距離からヒグマ側が意図して一歩でもこちらに踏み出してきた時だ。おそらく、山でのその距離は少しマージンをとっても５０m前後だろう。ヒグマの生息地に食い込むような人里では、周辺の山にヒグマが暮らすことはむしろ当然のことである。ヒトは至近距離でヒグマと遇わないように細心の注意を払い、人里では知恵と工夫でヒグマが降りない努力をまずする。そのうえで、ヒグマがその距離を侵しそうになった場合に、断固とした態度で威嚇・威圧を加えヒグマの側にその距離を覚えさせる。これが、理想の追い払いなのだ。
それには、ヒト側がもっとヒグマを知らなければならない。ヒグマを近くに見かけて大騒ぎをしたり、顔面蒼白でパニックって走って逃げたりしているようではおぼつかない。
（中略）
５０mでなくてもいい。１００mでもいいから、ヒトとヒグマはもっと普通にできないのか。威嚇もせず依存もせず、素知らぬ顔でそれぞれのペースで活動するような。そして、人びとは図鑑やモニターではなくときどき現物を見、そのリアルなヒグマから何かを感じ、そして自らのいろいろを考えてゆくことができないか。いつもそんなことを思ってしまう。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４ヒグマの本質）

私などは、吉村昭の小説「羆嵐」などを読んで、ヒグマはモンスターのように恐ろしい野生動物だというイメージを持っていた。しかし、岩井基樹はそうではないという。岩井基樹も、昔は、私と同じようなイメージを持っていたようだが、北海道で詳しくヒグマを観察しているうちに、そういうイメージは錯覚だと気がついたのだそうだ。「熊のことは熊に訊け」（岩井基樹、２０１０年、つり人社）において、彼はいう。「確かに、ヒグマは外見、山での走破性、知恵と力、威圧感、そしていざというときの破壊力などは、モンスターの素質十分である。（中略）ヒグマという動物は、シカやキツネのようにたびたびヒトの前に姿を現すわけでなく、ヒトの側がよほど意識し注意深く活動していないと、そうそう目にできる動物ではない。臆病で警戒心が強く孤立性の高い動物なのだ。特にヒトという動物は野生界からするとかなり異質な存在なので、その不気味なヒトと接触・悶着・軋轢を起こしたがらない。それだけ対応能力を持った動物ということもできる。」彼はこのように言い、次のように述べている。

１００頭に１頭か１０００頭に１頭か、パーセンテージはよくわからないが非常に低い確率で、特に異常性・危険性を持ったヒグマが出来上がることが確かにある。そのほとんどは人為的要因で、残りのほんのわずかは遺伝的かもしれない。北海道には、そういうクマが出来上がる人為的な素地もいまだあちこちに転がっている。しかし、その環境で問題を起こして派手にマスメディアを駆け回る異常なクマをもってクマの像をつくろうとするのでは、いつまでたってもヒグマの実像はつかめない。（中略）
北海道でも、いろいろな自然に対してシンボルとなるものが道庁によって指定されている。北海道の樹としてはエゾマツ、花はハマナス、鳥ではタンチョウ。（中略）じつは、以前、北海道の動物としてシンボリックな野生動物を定めようと道庁が動き、ヒグマが候補に挙がった。ところが、「害獣をシンボルとするとはどういうことか！」と特に農業関係のヒモのついた議員から攻撃に遭い、北海道の動物という指定作業自体が頓挫して、そのまま現在に至っているらしい。
２００９年８月、札幌の北大でヒグマのシンポジュームが行われたが、このサブタイトルが「ヒグマは北海道のシンボルになれるか？」というものだった。恐らく５０年前なら、「いかにして恐怖の猛獣ヒグマを殺すか」「どうやって我々の北海道から害獣ヒグマを駆逐するか」という野蛮なものしか成立しなっただろう。しかし、時代は確実に変わりつつある。一般市民に広く開かれたこのシンポジュームは、全道から３００名近い来場者で熱気を帯び、ヒグマへの関心とともに、どうやって北海道で長年暮らしてきたこの強力な野生動物と折り合いをつけれるのか、共生思想のもと意識が広がり始めているのをひしひしと感じた。

目次に戻る！

「ひぐまとの共生」「自然との共生」

岩井基樹は、「熊のことは熊に訊け（その３安全距離を教える）」で述べたように、『山でフキを食べたり、樹に登ったり、水浴びをしたり、雪の斜面を滑って遊んだり。ヒグマはいろいろな表情を見せる。中には、私の存在を確認しつつ、一定の距離を保ってフキを食べ続ける個体もある。そういう個体には、私もただ穏やかに、面白がって眺めていたい。フキを食いたければ食いたいだけ食わせてやり、私は少し離れたところからその姿をしばらく眺めて、ただそこをそっと立ち去れば良いだけのことだ。（中略）多くのヒトはヒグマをその目で捉えたいと思っている。安全な距離、安全なシチュエーション、しかしできるだけ近くから眺めてみたいと思っている。』・・・と言っている。私たちは、クマとの安全距離を保ちながら、もちろんこの安全距離についてはクマも人間もともに知っているということが必要で、クマの側にも教えておかなければならないということなのだが、それによって、私たちは、クマとの安全距離を保ちながら、クマの生態を良く観察すべきである。 私は、「熊のことは熊に訊け」（岩井基樹、２０１０年、つり人社）を読みながら、心底そう思う。そこで、これからいくつか私の考えを申し述べたいと思う。ま

ず第１に申し上げたいことは、「宇宙の真理」「宇宙の原理」「自然の原理」ということである。これは「神の意志」と良いかもしれない。クマの生態を良く観察するということは、「宇宙の真理」「宇宙の原理」「自然の原理」「神の意志」に気づくということであり、「神とのインターフェース」がそこにある。私たちは、いろんな動物と接しまた知識としてその生態を知ることによって、「宇宙の真理」「宇宙の原理」「自然の原理」とか「神の意志」というものを感じることはどれほどあるだろうか。

宇宙の原理、それは神の意志と言ってもいいかと思われるが、そうだとすれば、私たちは、神の意志のままに生きているということになる。普通の人間は、人として恥ずかしくないように生きたいと思う。人として恥ずかしくないように生きるということは、神の意志ではないか？なのに、さまざまな悪人がいるのは何故か？世の中は、善もあるし悪もある。美もあるし醜もある。また、恵みあるし災いもある。また逆に言えば、善悪、美醜などの区別はないという言い方もできる。善悪、美醜の区別はあるといえばあるし、ないといえばない。これを、私は、両頭截断と言っているが、宇宙の原理は、両頭截断の原理である。神の導きもあるし悪魔のささやきもある。しかし、私たちが神に祭りを行い皆んなで祈りを捧げるとき、神はそれに応えて私たちに幸せをもたらしてくれる。祭りというものは、地域にとって欠くことのできないものである。祭りによって私たちの心に作用する宇宙の原理、祭りによって得られる神の導き、それを、私は、哲学的に、共生の原理と呼びたいと思う。

「熊のことは熊に訊け（その１はじめに）」に述べたように、 私たち人間はもちろんのこと、草木国土もすべてが宇宙の真理というか宇宙の原理に基づいて存在している。私たち人間は、これから宇宙の原理というものを明 らかにして、その原理から外れない生き方をしなければならない。 人間以外の生きとし生けるものは、無心にただひたすら命を大事にして生きている。また、国土という命を持たないものも、宇宙の原理に基づいて存在している のであるから、もし人間も宇宙の原理にしたがって生きていくのであれば、草木国土といえど、大事にしなければならないのは当然のことであろう。「自然との共生」に徹することがきわめて大事な課題である。２１世紀のこれから向かうべき世界文明は、生きとし生けるものすべての命を大事にする文明でなければならない。「ひぐまとの共生」「自然との共生」はこれからのきわめて大事な課題なのである。

なお、こののち、宇宙の原理を具現化した「ヒグマのイヨマンテ」が最高の祭りであることを説明するが、その前に、私の住んでいる秩父の矢行地というところの祭を紹介し、「祭りは共生のためのシンボルであって、祭りは共生思想の具現だ。」ということを、別の観点からではあるが、申し述べておきたい。祭というものの本質を理解する上で参考になるだろう。私は、祭は共生のシンボルであると思う。

http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yagyouti.pdf

目次に戻る！

熊祭り

数多い祭りの中で何故熊祭りが最高の祭なのか？

ヒグマは日本では最強最大の獣（けもの）で、アイヌがカムイ(神)と崇（あが）めていたが、確かに山で見るヒグマは威風堂々としていて、見るものをして畏敬を感じさせずにおかない。まさに「緊張感ある自然」を創出している野生動物である。
アイヌは多神信仰でいろいろな守護神支配神の他に、地上の自然物も総て天上に住む神々が、アイヌに贈り物を届けに訪れた仮の姿（化身）と信じていた。神々は普段は天上の神の国（カムイモシリ）でアイヌと同じ姿で、同じような生活していると考えていた。したがって、神の化身はヒグマに限らないのではあるが、ヒグマは、威風堂々としていて、見るものをして畏敬を感じさせずにおかない。そこで、アイヌは、ヒグマの霊送りの儀式（イヨマンテ）にもっとも力を入れたのである。

現在日本で行われている祭のほとんどは神社の祭である。そしてその神社では、神像あるいは神の使いであるキツネやオオカミが祀られている場合のあるが、多くの場合、鏡であったり記紀に登場する神々である。岩や山や川や巨樹がご神体になっている場合もないではない。アイヌの場合は、熊やシマフクロウやサケが神の使いとして祀られ、霊送りの祭り（イヨマンテ）が行われている。これはきわめて注目すべきことで、私は、「神とのインターフェース」という点でもっとも優れたものであると思う。イヨマンテは、熊やシマフクロウやサケが現存する野生生物であるという点でオオカミの場合と異なるし、霊送りの祭りが再生の祭りであるという点でキツネの場合と異なる。イヨマンテは、熊やシマフクロウやサケが再び自分らの地域にやってくることを願う、つまり自分らの地域が自然豊かな幸（さち）多い地域であることを願う祭りであるということだ。

これからの時代は、世界的に見て、自然再認識の時代であると思う。だとすれば、イヨマンテは、世界的に見て、これからの時代を切り開く価値の高い祭りである。私はそう考える次第である。しかし、今ここで強調したいのは、さらにその先の思想として、イヨマンテの中でも、熊祭りが最高の祭りであるということだ。それは何故か？それはヒグマの特性というか本質による。人との響き合い、ふれ合い、コミュニケーションという点でいえば、岩井基樹が「熊のことは熊に訊け」（つりびと社）の中で縷々述べているように、ヒグマは安全距離について教育することが可能だし、その安全距離さえ維持してさえおれば、心ゆくまでヒグマの生態を観察することができる。自然の中におけるヒグマのさまざまな活動にある種の感動を覚える。その感動が、共生の原理を悟る道を開いてくれるの

だ。共生の原理を哲学として表現したものが梅原猛のいう「人類哲学」であるし、共生の原理を文学として表現したものが宮沢賢治の一連の童話である。そして、そういった共生の原理を日常生活の感性として育てていったのがアイヌの人びとである。

アイヌの人びとは、ウソをつかないし、友誼を重んじ、夫婦の情もこまやかである。一般の日本人と違って、アイヌの人びとはよほど上等にできている。司馬遼太郎はその著「菜の花の沖」でそのことに触れているが、私もそう思う。アイヌの人びとは共生の原理を生き、そのために行っているのが熊祭りである。ヒグマは共生のシンボルだ。私たちは、自然の中におけるヒグマの生態を知れば知るほど、ヒグマとの共生に憧れるし、自然との共生に憧れるのである。安全距離を保ちながら、心ゆくまでヒグマの生態を観察したいものだ。多くの人びとは無意識のうちにそう感じている。岩井基樹は「熊のことは熊に訊け」（つりびと社）の中でそう言っているのである。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その5ヒグマの出産）

北海道のヒグマの出産は厳冬期に冬眠穴の中で行われ、便宜的に２月１日をヒグマの誕生日として月齢・年齢を考えることが多い。
誕生時のヒグマの赤ちゃんは体重約４００g。５０ccのペットボトルより小さな状態だ。
そのペットボトルほどの目も開かない赤ちゃんは母グマの母乳で育ち、ちょうど5月の連休の頃、産室となった冬眠穴から母グマとともに外に出て、我々が知る山の風景を見ることになる。その時の体重が４kg前後。
そして、その仔熊が母グマの真似をして北海道の山の幸をどんどん食べて成長していき、ちょうど一歳の誕生日を二度目の冬眠穴で迎える頃、４０kgまでに成長する。さらに、北海道ではオスのヒグマは順調に生き残ればだいたい４００kgにまで達する。
つまり、生まれた仔熊は生後三ヶ月で体重を１０倍に増やし、一年で１００倍、そしてさらにオスなら最終的に１０００倍に成長し、日本で最大最強に陸上ほ乳類として北海道の山を闊歩する。
ヒグマが「小さく産まれて大きく育つ」といわれるゆえんはこの数字が雄弁に語るが、ヒトの我々に単純にこの１０００倍という数字を当てはめると、男性なら４トンほどの巨漢がその辺をウロウロしなくてはならないことになる。

熊のことは熊に訊け（その６ヒグマの食べ物①）

冬眠期間中のヒグマは飲まず食わずで過ごすが、カエルやヘビの冬眠と異なり、体温・脈拍・新陳代謝を生存最低ラインまで低下させて朦朧とウトウトしている状態なので、それなりにエネルギーを要する。冬に身籠もる母グマなら、出産・育児のエネルギーも必要

だ。（中略）北海道でさまざまな環境変化に対応して食性が草食獣化しているヒグマだが、歯などが草食獣並みに変化している訳ではない。もちろん牛などのように反芻（はんすう）もしない。なので、ヒグマの食べる食物の栄養を考える際は、その食物の含有栄養素ではなく、（ともかく消化のいいものをどれだけ大量に食ったか、その量を考えなくてはならない。）つまり、ヒグマは明らかに大食らいのイメージがあり、おおかたその通りなのだが、春先から草や芽をいくら食べたところで、実際に摂取できている栄養は見かけほど多くないのだ。
そこで、「ヒグマがもともと肉食動物」という点は見逃せない。現在の北海道のヒグマは、ほとんど草食ベースの雑食性だが、身体のさまざまな機能はむしろ肉食に適し、現在でも動物性の食物には目がない。本来的に肉好きなのだ。肉というのは、ほ乳類、魚類、昆虫などの動物性タンパクを全部含めて、ここではそう表現している。それで、現在でもヒグマはいろいろな形で肉を食べたがるが、ほ乳類ではシカ、魚類ではサーモン、昆虫ではアリがポイントとなっている。その他、人工的な牛・鶏・豚、本来ヒグマの口に入らないはずのカツオやカレイなどに加え、その加工品もヒグマに対する誘引力が強い。特に腐って溶けかけたような肉は腐敗臭も強烈で、周辺のヒグマを強力に引き寄せる。この点、ヒトと野生動物の感覚は異なっていて、ヒグマは腐った肉を大喜びで食べる。（したがって、北海道の山里で肉を捨てるなどはもってのほかなのである。）

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７ヘロヘロ熊は危険）

アラスカなどでは冬眠に当たる言葉にdenningが使われるが、キツネやオオカミの子育ての巣穴などにもdenが当てられる。誤解なく翻訳するなら、冬眠より巣ごもり・冬ごもりとした方がはるかによく、つまり、穴で眠っているのではなく、穴に籠っている＝冬ごもり程度に受け取った方がニュアンスが近い。まれに、山スキーなどで冬眠穴を踏み抜いてヒグマが飛び出てきたりする事例を聞くが、ヒグマは寒いから動けず穴に入りじっとしている訳ではなく、たとえ極寒期でも動く気になりさえすればいくらでも動ける。そこがカエルやヘビの冬眠と根本的に異なる部分だ。ヒグマから分化したホッキョクグマのオスは冬眠をしない。これは、冬期にアザラシなどの海獣を補食し十分活動できるからである。つまり、ヒグマの冬眠は寒いからではなく、エサがないからなのだ。（中略）なので、冬眠を終えた直後のヒグマは、四季の中でもっとも衰弱している状態といえる。単に皮下脂肪の量ではなく、筋力、体力などの運動機能が最低で、ヒグマにしてはヘロヘロの衰弱状態なのだ。（中略）そのヘロヘロ熊でも、ケンカならヒトはほとんど太刀打ちできない。実際は、冬眠開けのヒグマが空腹のため苛立っている可能性もあり、むしろ食べまくっている盛期のヒグマより攻撃性は高いかもしれない。シカの死骸に付いている空腹のヒグマなら、近寄った者への攻撃性はまず高いと考えるべきだろう。
ヒグマとのやり取りの基本は、力勝負ではなく、あくまでも心理戦だということを銘記して欲しい。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その８冬眠しないヒグマ）

秋の木の実で食いだめのラストスパートを終えたヒグマたちは、おおむね１２月初旬までに冬眠穴を見つけ、あるいは自ら掘って冬眠態勢に入る。しかし、現在、異なる状況が生まれつつある。昨今、道内で増えたエゾシカが原因だ。シカが増えたエリアでは、駆除に引き続き狩猟期にも多くのハンターが訪れシカを撃つ。回収不能個体（手負いのシカ死骸）に加え、解体後の残滓（内蔵などのゴミ）が放置されるケースが増え、ヒグマにとっては実に好都合な「おいしい環境」が生まれている。冬眠しないヒグマというと、苫前の三毛別事件 が思い浮かぶ。http://matome.naver.jp/odai/2133389960035130901

（恐ろしい惨状の詳しい様子は次をくりっくしてください。https://www.youtube.com/watch?v=5GsjBZ5HQVY　）

この手のクマは、冬眠になっても山を徘徊するので「穴持たず」などと呼ばれ、人びとに恐れられた。三毛別のクマも含め、食い溜めが不十分で穴持たずになると以前は考えられていたが、事実はむしろ逆で、食糧が豊富な年にヒグマの冬眠入りは遅く、乏しい年に早いことが現在までに判ってきた。三毛別事件が起きたのは１２月。しかし、現在の北大雪山塊では１２月にヒグマが雪を踏んで山を歩き回るのは、むしろ普通の光景だ。これは、「おいしい環境」のせいだろう。（中略）

平たく言えば、これらの穴持たずはシカという大好物につられてつい冬眠を放棄しているヒグマなので、「穴持たずは凶暴で危険」という１００年来の北海道の定説はそっくり覆っている。そもそも三毛別事件が起きた理由は、穴もた図が凶暴だからではなく、人為的な原因が幾重にも重なったことによると解釈すべき。年によって私の自宅を行動圏に含む若い穴持たずらしきものがあるが、その若グマが特別危険だとか異常性を持っているということは決してない。質素な私の暮らしに比べても遠慮がちで慎ましやかなものだ。ただ、冬眠放棄の穴持たずタイプが、冬期間にどこでどういう暮らしをしているのか、あるいは、この山塊でどれぐらいのパーセンテージで出現しているのかは、残念ながら判っていない。私は冬の山が好きでときどきソリにテントを乗せて引き、ちょっとしたロングとレックに出かけるが、昨今ではクマ減退用のスプレーを懐に忍ばせ暖めながら深い雪の上を歩いている。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その９着床遅延）

岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で以下のように述べている。

着床遅延というのは、聞き慣れない言葉かもしれない。北海道ではヒグマの他エゾクロテンなどに見られる繁殖戦略で、交尾期のあと受精卵が着床・妊娠して成長をはじめるまでに一定のタイムラグが遺伝子的に設定されたシステムだ。北海道のヒグマの交尾期は６月前後。そして着床・妊娠が１１月〜１２月だろう。つまり、約半年の着床遅延があることになる。

何故このようなややこしい戦略になったか？
もちろん、母グマが出産する時期としては冬眠中が明らかに有利だろう。ならば、１１月過ぎに交尾すれば良いと思うかもしれないが、その時期は（オスメスともに）ちょうど穴を探し冬眠の準備態勢に入らなくてはならない。交尾期にはオスが活発にメスを探し、時にメスの連れている仔熊を殺すこともあるので、１１月交尾母子グマにとってもヒグマ全体にとってもあまり有利ではない。
では、その前の秋の時期というと、これまた食い溜めのラストスパートで忙しく、交尾どころではない。冬眠開けの春は体力が最低でリハビリを行わなければならず、結局、リハビリを終え体力が回復してから食い溜めをはじめる前、つまり、６月前後という線しか交尾にいい時期が浮かんでこない。（中略）

では、着床までの時間は単なるタイムラグかというと、それが違う。夏から秋にかけての食い溜めが正常にできなかった母グマには、どうやら半年間温存された受精卵が着床しない。逆に、食い溜めが不十分にも関わらず妊娠・出産・子育てを絶食の冬眠穴内で行うとすれば、それこそ母子ともに生存が危ぶまれる。完全に解明されている訳ではないが、「食い溜め期に十分食べられなかった母グマは流産してしまう」と言われている所以はここなのだ。
冬期の絶食絶飲を迎えるヒグマにとって食べることは生き抜くことそのものであり、また、お腹の子の生死にかかった母グマにとっては、単に生きること以上の意味があることかもしれない。

ヒグマは単に図体がでかいだけでなく、冬眠戦略・着床遅延など、いくつもの理由でどうしても沢山食べる必要がある。（中略）私たちは、まず「ヒグマは食いしん坊で仕方がない」と認めてやり、その理由のもとでヒト側の戦略を考えなくてはならない。

目次に戻る！

## 熊のことは熊に訊け（その１０ヒグマの食物②）

岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で以下のように述べている。

ヒグマが各季節、各環境でどんなものを食べているかを調べるには、おおむね三つの方法がある。まず、食痕（しょっこん＝食べ跡）から調べる方法。次に、ヒグマの糞から調べる方法。三つ目は、実際にヒグマの現物を観察し、何を食べているかを確認する方法。

私は、その三つの方法を使いながら、「食いしん坊なヒグマ」にふさわしく、食を中心に私の調査エリアの一年を作ってみた。次の表である。

http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/nensyuuki.pdf

この表は、湧別川水系・北大雪山塊の調査から得たデータをもとにしているが、知床、道南の一部など特殊なエリアを除き、おおむね北海道のヒグマの年周期だと思っていいだろう。
ただし、ヒグマの個性が食に強く現れる要素もあるため、すべてのヒグマがこの表に従う訳ではなく、また、同じ北海道でも気候・植生あるいはヒトの暮らし方など、地域性によってばらつきがある。
例えば、本州同様ブナ林の広がる道南・渡島半島（おしまはんとう）ではブナの実の豊凶がヒグマの行動に影響し、カラフトマスの遡上が順調に行われるオホーツク海側のエリアでは、やはりその年のカラフトマスの遡上量や時期が無視できない。その年々の、特にシーズン前半の気候の変動にもヒグマのいろいろな同行がファジーに連動するだろう。また、農業の作物種によっても、ヒグマ用の防除フェンスの普及率によっても、ヒグマの行動パターンは変わる。
この表はあくまでもスタンダードである。

このヒグマの活動年周期表をつくった狙いについて、岩井基樹は「熊ことは熊に訊け」の中で次のように述べている。

私にとっての食物云々は、生態形状のヒグマを知りたいからというよりは、自分が追う一頭一頭の心理や動きを読むための材料としてある。私のヒグマ観察・ヒグマ研究のルーツは、アラスカの原野での生存のためのリスクマネージメント。ヒグマが闊歩する森で暮らし、活動するための安全確保。現在のスタンスもあくまでその延長線上にある。つまり、「どうやったらクマと悶着を起こさずにヒトが山や森を楽しめるか」あるいは「ヒトとヒグマが軋轢をどう解消しながら北海道という島に暮らせるか」というものであって、それに影響の乏しい細かいことはあまり頓着しない。当初は、ヒグマの食物を詳細に調べ、まるでコレクションを集めるように羅列して書き記したが、その羅列は今や遠い過去の博物

館のようなたたずまいを見せている。今は、その博物館から選りすぐった特別なヒグマの食物に注目して、この動物のいろいろを捉えようとしている。

目次に戻る！

神秘の熊スピリットベア

２０１４年１２月２８日１３時にNHK BSプレミアムで再放映された「神秘の熊スピリットベア～カナダ 聖なる森をゆく～」を見た。さすがにNHKだなあと思える素晴らしい番組であった。

カナダの太平洋側に広がる「レインフォレスト」という森において、映画俳優の堤真一が、ギットガット族のレンジャーのような仕事をしているマーベン・ロビンソンという男の案内で、スピリット・ベア、つまり森の精霊・白い熊（北極の白熊とは種類が違う）を追い求めるという番組である。

ギットガット族の ポール・ニックレン は、スピリットベアを守るためには秘密にしておくのではなく保護するためには、むしろ人々の協力が必要だと考えた村の長老に託され、もう何年もスピリットベアを観察を続けて来ている素晴らしい男である。

その息子のネルソン君（8歳）も一緒に森を歩き、赤ちゃんの頃から森や熊を身近に感じて育ってきているらしい。

堤真一は、　彼ら親子と一緒に森に入り、森の精霊・白い熊「スピリットベア」に会うことができる。しかも、きわめて至近距離でだ。森の中で本当に近くで出会えたときのその近さはびっくりである。もっとびっくりなのは、ほんの数メートル先に熊がいるのに、悠々と岩の上でお昼寝をしていたネルソン君だ。

スピリットベアは白い熊なので、目の位置がすぐ判るし表情も判る。目は口ほどにものを言うの喩えがあるように、何となく目を見ているうちはいいのだが、じっと相手の目を見つめると相手に緊張感が走る。スピリットベアの場合は、目の位置がすぐ判るので、何となく目を見ることができる。じっと見つめる必要はない。黒熊の場合はそうはいかないようだ。毛も黒く目も黒いので目の位置がはっきりしない。したがって、熊の顔を見る

時、目をじっと見つめていなくても顔をじっと見つめていると、黒熊の方が目をじっと見つめられていると感じて、緊張するらしい。やくざの場合の決して目を見つめてはいけない。面をきったとして難癖をつけられる。

スピットベアの場合は、 目の位置がすぐ判るし表情も判る。 だから人間の側もスピリットベアのゆったりした構えに応じてゆったり構えていることができる。お互いがゆったり構えているのだ。そうしている内にお互いに信頼感というか心の響き合いのようなものが生まれてくるようだ。

その辺の様子は、NHK BSプレミアムの「神秘の熊スピリットベア〜カナダ 聖なる森をゆく〜」を見ればよく判るのだが、まだNHKのオンデマンドでそれを見る事ができないので、その代わりに、 ポール・ニックレン の案内でカナダの写真家ポール・ニックレン のチームが撮影した貴重な動画を紹介しておきたい。

http://nationalgeographic.jp/nng/article/20111104/289542/

　そのブラックベアとスピリットベアが実は同じ「熊」で、毛の色を伝える遺伝子の組み合わせで、黒い方が優性遺伝子なので、白いスピリットベアは数が少ないということらしい。
　それは、ギットガット族に伝わる「氷河時代のことを忘れないように、この世界を作ったワタリガラスが、黒熊10頭につき白熊1頭が生まれるようにした」という伝説があるようだ。

この「神秘の熊スピリットベア」という番組の登場するハートレイベイという村に住むギットガット族の ポール・ニックレン は、村の長老から言われて「スピットベイの保護」「森の保護」のためにレンジャーのような仕事をしているが、スピリットベアとは家族のような感覚で親しく、そしてまた慎ましく接している。まさに、熊との共生がごく当たり前のように日常生活を送っている。「神秘の熊スピリットベア」という番組という番組を見てつくづく思うのは、「自然との共生」というものを真に理解し、野生動物を含め自然を守っていくならば、私たち人間は本当に豊かな人生を歩むことができるのではないかということである。そのことを微力ながら日々の生活で実践しているのは岩井基樹である。わが息子ながら岩井基樹に諸手を上げて拍手を送りたい。

https://www.youtube.com/watch?v=q_X7b3e9uqc

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１１ヒグマの食物③）

ヒグマの食物は、おおむね主食、嗜好品（サプリメント）、大好物の三つに分けて捉えることができる。
主食とはその時期に比較的大量にあって、ヒグマがまあまあ好んで食べるもの。代表的のは、６月のフキである。そして８〜９月のデントコーン。デントコーンというのは、牛などの家畜の飼料用のコーンでヒトの食べるトウモロコシとは異なり、かなり大雑把に高密度に栽培される。北海道ではごく普通の作物。さしたる主食のない時期は、前半が新芽・草本、後半は木の実、それぞれいく種類かを食べ合わせ主食代わりにしている感じだ。例えば、秋なら、ヤマブドウ・コクワ・マタタビあたりのツル科の植物の実全体は主食代わりに働く。ヒグマの調査に行く時は、まず、その時期、その地域の主食や主食代わりが何であるかを見定めて現場に入る。その地域のヒグマの動向を決めるもっとも大きな要素が、この「主食」「主食代わり」と呼んでいる食物である。
嗜好品というのは、多少語弊があるが、ヒトのおかずやおやつ、あるいは栄養食・サプリメントに当たるいろいろな草本・キノコ・木の実・昆虫などの食べ物で、この部分に個々のヒグマの好き嫌い・経験・習慣の違いがもっとも現れやすく、個体識別を行う時の一材料となることが多い。
およそどんなヒグマでも、見つければ好んでどんどん食べあさるものがある。これを「大好物」と呼んでいる。夏のある時期に無数に落下して足の踏み場もなくなるほどのヤマグワ、あるいは、近年、駆除や狩猟で増えたシカの死骸などはこの大好物に含んでいいだろう。また、人間の食物は、ヒグマが食べれば、だいたい食べあさるので大好物になりうる。

ヒグマの好みと摂取できる栄養価は必ずしも一致しないが、栄養価が高く、大好物で、なおかつ大量に存在するという・・・ヒグマにとって完全無欠のような食物がある。それが遡上サーモンだ。北海道のヒグマは、この最強の食物が適正に遡上して来るか来ないかでその動向を容易に変える。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１２サーモンとは何か？）

北海道で主なサーモンはカラフトマス（ピンクサーモン）、シロザケ（チャイムサーモン）、サクラマスの三種。パーマークという小判型の斑点を体側に配したサクラマスをヤマメと呼ぶが、これは、海へ降りる前の稚魚か、海へ降りずに川に育った個体のこと。北海道の特定河川で、北米のレッド（ベニザケ）が試験的に放流されたり、あるいは北米のキングサーモンやシルヴァーサーモンが迷い込んで北海道の河川に遡上したりする例はまれに見られるようだが、北海道のサーモンといえばカラフトマス、 シロザケ、サクラマスの三種である。これらはサケ科のサケ族に属する。

北海道のこれ以外のサケ科の魚には、イワナ族のアメマス、オショロコマ、イトウ科のイトウがある。支笏湖などで見られるヒメマスはレッドサーモンの陸封型だ。その他、外来移入種としてニジマス、ブラウントラウト、ブルックトラウト、サツキマス（アマゴ）などがいろいろな経路で北海道あちこちの河川に入り込んでいる。（中略）

本州では河川の健全さを計る尺度にアユを用いられることがあるが、北海道の河川では自然に遡上するサーモンによって量ることができると思う。サーモンが自然産卵を行い、勝手に往き来して世代交代を繰り返し暮らしている河川は、まあ、良い川ではないだろうか。（中略）

到来するサーモンの群れを待っているのはヒグマやキツネだけではない。水中昆虫はもちろん各種微生物、鳥類、ほ乳類。いろいろな鳥獣に食べられたサーモンはその動物の地肉となり、残りは糞となって山塊に拡散分配される。糞はここでも微生物などの分解を経て、草本・樹木に吸収されてゆく。ここで終わりかというとそうではない。草木はシカやヒグマにまた食べられる。ドングリも食べられる。枯れた草や落ち葉は分解され、養分として今度は川にとけ込んで海に流される。海へ下った山の養分は、サーモンのエサともなるプランクトンやオキアミを養う。そのオキアミを山から下ったサーモンが食べて・・・云々・・・と、無数にある中の一つの経路をいえばこんな感じだ。つまり、北海道では、ありとあらゆる生物がいろいろな形でサーモンに依存し、絡み合いながら存在している。これが北方系のエコシステムだ。（中略）

サーモンというのは、本来、北の大地にとって、北の野生動物にとって、北の森にとって、何か特別の意味がある生物のような気がしてならない。北海道のサーモンは、我々ヒトの産業やビジネスにとってのみ重要な資源ではない。少し山の樹々や野生動物たちに返してやることはできないものか。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１３野生の精神）

見知らぬタイガの森やツンドラの原野を現地調査で旅する時、私の場合、事前に詳細を調べ尽くして訪れたりはまずしない。中には、かにかの本で偶然読んで、行く前からそこである食べ物を食べてみたいと意欲満々に切望したりする場合もあるが、だいたいは無知のまま訪れる。ブラジルのジャングルより毒物は少ないと思うが、そこには日本で慣れ親しんだものとは異なる見知らぬ植物・動物が存在するので、それらのうちどれを食べて良いのか判らないのが普通だ。例えばユーコンの森なら、魚ではグレーリング、パイクという

北海道では見慣れない魚が６月の初めから支流の合流点などで普通に釣れ始め、植物に関していえば、ほとんどが細かい名称を知らないものばかり。それで、なるべく日本で食べたことのことのあるものに似たものを選んで食べてみるが、その場合も、あまり一気に大量に食べることはしない。五感でよく感じながら、まず少量。それで、今度は自分の身体の変調を自己観察し、大丈夫となったら徐々に通常食いに入るのだが、この過程で食べられるもの、おいしいもの、そしておいしい調理法がだんだんとできていく。もう一つは、他の動物や昆虫がよく食べているものから選んで食材にする方法。できることなら、ある特定の動物・昆虫が食べているだけでなく、いろいろな動物・昆虫が競い合うように好んで食べていれば、我々ヒトが食べても大丈夫な可能性が少し高まる。この場合も、様子を見ながら食べる量を増やしていく。私は、北大雪でも目についた植物に対してまったく同じことをやったが、食べて大丈夫ということと、美味しくいただけることは相当違う。ほとんど関連性はないといった方が正しいかもしれない。（しかし、美味しくなくても食べてさえいれば命をつなぐことができる。）（中略）

祖父は戦時中、生の大根をかじって生き延びたと、子供の私に話した。アラスカでは大根さえなかったが、その代わりその森の豊富な魚と鳥獣と植物が私の命をつないだ。

読者は、餓えという感覚を知っているだろうか。日本では、食糧自給率云々と大げさに騒ぎつつ食糧の三分の一を食べ残して廃棄し、おまけに肥満小学生が溢れているくらいだから、餓えとは無関係なのかもしれないが、野生動物はちょっとした事ですぐに飢餓の問題と対峙（たいじ）しなければならなくなる。私の場合、餓えで死に瀕（ひん）したと意識したことはないが、それでも餓えのために意識が朦朧としたり手がしびれたりいろいろな不調が現れた事はある。（多分、私には、野生の精神といっても良いような強い生命力があるのかもしれない。現在、多くの子供は、ひ弱で、何としてでも生き延びようとする強い生命力に欠けているように思われてならない。そこで思うのだが、野生の精神といっても良いような強い生命力のある子供を増やしたい。）
日本で普通に生活している限り実体験を積むのも難しそうだが、三ヶ月、いや一週間でいいから、スーパーやコンビニ類を一切使わず、河原や森で捕れるものだけで暮らすとする。川へ行って魚を捕ったり、山で山菜を摘んだり、ときどき木の実を拾ったりして暮らしてみる。保存食や調味料などを用いるのは反則。無理ならば、三日でもいい。それも無理なら、一生懸命想像するだけでもして欲しい。（子供が勝手に想像することは無理なので、大人の誰かがそういう体験をして、子供に話をする必要があるけれど・・・・。）

目次に戻る！

食糧危機

岩井基樹は、 熊のことは熊に訊け（その１３野生の精神） で紹介したように、「 読者は、餓えという感覚を知っているだろうか。日本では、食糧自給率云々と大げさに騒ぎつ

つ食糧の三分の一を食べ残して廃棄し、おまけに肥満小学生が溢れているくらいだから、餓えとは無関係なのかもしれないが、・・・云々」と言い、「餓え」について書いているが、私もこの際、「餓え」の事に触れておきたい。

世界の食糧危機が叫ばれているが、日本でも突然食糧危機に見舞われることがないとは言い切れない。いつかは来る食糧危機のために政府としてやるべきことは少なくないが、現実には、ほとんど無策のまま推移しているし、日本国民の意識も迫り来る食糧危機に無頓着である。

https://www.youtube.com/watch?v=IDrMZdqEUBs

https://www.youtube.com/watch?v=y4IMFn5qjqQ

そこで私が思うには、将来餓死者が続出するものすごい食糧危機がやってきても、子供たちには何とか生き延びて命を繋いでもらいたいという事だ。私のような老人はもう子供を産む事もできないし、死ぬ時がくれば心置きなく死んでいけばいい。しかし、子供はそうはいかない。子供たちには何とか生き延びて命を繋いでもらいたい。子供たちは、どんな食糧危機がやってきても生き延びていかなければならない。それが親の責務ではないか。親たるものは、これからどんな食糧危機がやってきても、子供たちが生き延びていけるよう、今から対策を講じていくことが望ましい。ではどんな対策を講じるか？　そこが大問題で、この際、私はその事を少し考えてみたいという訳だ。

非常な食糧危機に陥った時、国は、世界から食糧に緊急輸入に努めるだろうが、恐らく、しばらくはスーパーの棚には食糧が無くなる。そのような危機的状況は、数週間か数ヶ月か判らないが、しばらくは続くだろう。
その対策としては、その間の保存食を家の倉庫に備蓄しておくというのがいちばん良いように思われるが、現実には実行しにくい。非常な食糧危機がいつやってくるかまったく予想できないからだ。
次に考えられる対策としては、上杉鷹山の書いた「かてもの」にしたがって家の庭に食べれる植物を植えたり、魚鳥獣肉の貯蔵をすることだ。上杉鷹山の「かてもの」については次を参照されたい。
http://katemono.com/

上杉鷹山の「かてもの」は、東北三大凶作のひとつである天保の大飢饉（1833年）に大変役立って、米沢藩では一人の死者も出なかったと言われている。

しかし、家の庭が広ければ、 上杉鷹山の「かてもの」が大いに役立つとは思うけれど、
多くの家庭は庭が狭いので、結局は、山で山菜や木の実などを食べて命をつなぐ事を考えねばならない。
ブッシュクラフトという言葉がある。ブッシュクラフトは、自然環境の中での生活を目的としている。持ち物をシンプル化し、最低限の装備で、森の中で生きていくライフスタイルや、その術について学んだり、趣味として楽しむ者を総称して「ブッシュクラフター」と呼ぶ。これは趣味であるので楽しい。楽しみながら長続きすることができ、いざという時には、山で山菜や木の実などを食べて命をつなぐ事ができるかもしれない。私としては、そのようなブッシュクラフトをお勧めしたい。
野生の感性の重要性、食糧危機に限らないが、危機を乗り越えて命をつなぐには、ひ弱な精神ではダメで、強い精神を身につけておかなければならない。文明や人間社会から隔離され、またはその恩恵を十分に享受しがたい状態においても、何とか生存し続けようとする強い精神である。それを私は野生の精神と呼んでいる。子供たちにはブッシュクラフトをやらせて、是非、野生の精神を身につけさせたいものだ。
ブッシュクラフトという名称は使っていないけれど、そのような団体はいくつかあるようなので、是非、親子ともども参加して欲しい。ブッシュクラフトの代表的な団体を紹介しておこう。
http://backcountry-boys.net/bushcraft-yagai

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１４ヒグマの嗅覚）

食に絡んだヒグマの身体的特徴の一つ特筆すべきところがある。彼らの嗅覚だ。味覚と嗅覚はかなり関連性の強い感覚なので、食いしん坊なヒグマはこの嗅覚を最大限に利用して暮らしている。シートン（注：米国の博物学者、作家。英国生れ。1866年—1879年カナダの森林地で生活、のちカナダ、英国で学ぶ。 1898年 発刊の「私が知っている野生動物」が有名。）の時代から脳の解剖によってヒグマの嗅覚中枢が発達している事は判っていたが、現在では、ヒグマの嗅覚はイヌの４～５倍敏感とされている。生ゴミやシカ死骸なら、ヒグマは数キロメートル先から匂いを追って嗅ぎ当てる事ができる。我々ヒトが視覚を使ってものを見るのと同様、ヒグマは「嗅覚を使っていろいろを見ている」と表現できるだろう。それで、ヒトが視覚に頼りがちなように、ヒグマは匂いに最も敏感に反応する。突出した嗅覚に対してヒグマの視覚は弱く、聴覚に関して私はよく分からない。ただ、あるテストで、静寂の中８５m先の一眼レフの連写音を聞き取れる事が判明し、それなりに優秀と表現できる範囲だと思う。
ヒグマは、はじめて経験する匂いには、若グマでなくとも必ず反応する。その反応の多くは、鋭い嗅覚で匂いを追って接近しそれが何かを確かめる行動だが、その時の警戒心は、

ヒグマの年齢、あるいは経験・性格によって、やはりいろいろだ。用心深く人知れず行う個体もあれば、フラフラ近づいて無邪気に立ち上がって呑気に漂う匂いを嗅ぐ若グマなどもある。
とにもかくにも匂いの元までやってきたヒグマは、次に、その匂いといろいろな事象を関連づける。実際は、周辺のさまざまな要素があるので複雑だが、無理して単純化して言うと、それが「美味しく、危険もない」と学習すれば、次回からは、その匂いは誘引要素としてヒグマに働くようになる。逆に、「危険である」と学習すれば、忌避心理を抱くようになる。そして、「美味しくもなく、面白くもなく、危なくもない」と学習すると、その後、その匂いには反応しなくなる。
過去において、土葬の習慣があるエリアではヒグマが墓を暴いたりする例があった。１ｍやそこら掘って家畜の死骸や生ゴミを土の中に埋めて投棄しても、ヒグマに対してはほとんど効果がない。ヒグマは、腐敗時に発生するメタンガスとそれらの食糧を関連づけて学習していて、地中内で発生するガスはその圧力で土を通って地上に漏れ出るので、匂いでその場所を正確に嗅ぎ当てる事ができるのだ。実験した事はないが、その種のガスをボンベに入れて持ち歩き、ヒグマと遭遇したときに風上でボンベのバルブを開けると、恐らく、ヒグマは過剰に反応するだろう。
ところで、山塊に存在するヒグマ同士がどの程度自分以外のヒグマを認知しているかだが、かなりの精度でお互いを把握し合っていると思う。ヒグマは、近隣に侵入しているヒトの存在を、通常はほぼ確実に察知している。山間に住んでいるヒトのありようも、時に興味を持って見て聞いて嗅いでいるに違いない。私はきわめて鈍感なヒトの五感を補うべく多少の道具と観察と分析を駆使してヒグを特定し、例えばある沢沿いにようやく４頭のヒグマを把握するが、その４頭のヒグマ同士は、恐らく彼らの嗅覚のみで、まるで手に取るように他の３頭を把握しているだろう。オス成獣、若グマ、親子連れなど、それぞれのヒグマは自分の能力を踏まえて上で、各々の持つ最も適した戦略で絶妙な行動圏・活動圏、そしてもしかしたら一種のテリトリー的空間を形成しているように思われる。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１５ヒグマの変幻自在）

ヒグマは凄い。これまで、山となく森となく幾度となくこの野生動物の前に身と心をさらしたが、思い起こすと、凄いという二文字が最も素直で的を射る。だが、ヒグマという毛むくじゃらの動物は、いったい何がどう凄いのか。
北海道の個体でも最大で４００kgにも達し、その巨体で軽々時速５０kmで地響きを立てて大地を駆ける。ツメは一撃で牛やシカはおろか同族の毛皮を内蔵ごと引きはがし、私などが薪割り用のグレンスフォッシュで渾身の力を込めてもびくともしない樹の幹を一撃の

もとにへし折り、三人掛かりでもびくともしない岩を軽々とひっくり返す。確かにヒグマは恐い。古今東西、ヒグマの生息地では数多くの人がヒグマの攻撃に遭い負傷し、ときには命を落としている。私自身、ヒグマのツメが手首をかすめて血が止まらなくなったりしたこともある。
一方、アラスカのデナリ、カトマイ、あるいは北海道では知床の一部、これらのエリアには人前に堂々と姿を現し、至近距離でヒトを無視して呑気に振る舞うヒグマが存在し、私の暮らす山にも私の薪割りを興味深そうに眺めているクマがいる。

（岩井國臣の注：２０１４年１２月２８日１３時にNHK BSプレミアムで再放映された「神秘の熊スピリットベア〜カナダ 聖なる森をゆく〜」を見ても、また星野道夫の撮影した次の動画を見てもクマは怖くないように思われる。
https://www.youtube.com/watch?v=Z5Fr_Dt2ssE　　　）

クマは怖いのか怖くないのか、いったいどっちなのか？

実は、この疑問が湧くところがヒグマの本当の怖さなのだ。つまり、ヒグマの怖さは、単に身体が大きいとか力がつよいとかツメが長いとかではなく、この動物の脳の中にある。高度で変幻自在に変化する彼らの脳がヒグマ一頭一頭に個性を持たせ、結果、単純なマニュアルで画一的に考える事がまったくできないのだ。

アラスカの空気を撮らせたら抜群だった写真家・星野道夫。遠い友人でもあった彼の死がすべてを物語っている。彼は常日頃からヒグマを観察し、理解に努め、可能な限りヒグマに接近してこの動物の息吹を感じながら静かに、まるでそっと撫でるようにその生命の姿をフィルムに写し取った。しかし、１９９６年夏のカムチャッカ、その彼がアラスカで経験した事のない思わぬ罠にかかった。餌付けによるヒグマの行動のエスカレートだ。恐らく、生きている彼が最後に感じたヒグマの本質が、この動物のもつ変幻自在さだったと思う。彼の愛したヒグマは、ヒトの手によって恐ろしく歪曲に変質させられ、彼の命を容赦なく奪った。

私は、彼の命を奪った出来事の本質を隅々まで洗い出し、そこから何かを学び取る事が、唯一彼の供養になると信ずる。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１６ヒグマの心）

先に述べたように、岩井基樹は、「星野道夫の命を奪った出来事の本質を隅々まで洗い出し、そこから何かを学び取る事が、唯一彼の供養になると信ずる。」と言い、ヒグマの心

について思索を深めている。まずは「 熊のことは熊に訊け」という著書の中で彼の述べている要点をここに紹介しておきたい。彼は次のように述べている。すなわち

１、キツネにしろヒグマにしろイヌにしろ、見れば見るほどある部分が人間的で、ヒトとのさまざまな行動に共通点を見出すことができる。実際に人間が持ち、人間の行動力の原動力となっている喜怒哀楽、好奇心、不安、安心、恐れ、自信、信頼、切迫、焦りなどのさまざまな感情を、特にヒトやヒグマやイヌが色濃く持っているのである。

２、心というものの実態が今なお私にはよく判っていない。今の関心はクマの心だ。

３、心の作られ方や動きには、一定の法則めいたものがある。ヒトにもクマにもある。ヒグマを知るというのは、その生理・身体特性に加え、心のシステムを読み解いてゆくことではないだろうか。

４、ヒグマ全体の学習・性格・戦略に関しては、私個人は発達心理学のカテゴリーである児童心理学が非常に参考になると感じている。もともと心理学が生理学・動物行動学と重なりながら発達してきた経緯を持つので、現在細分化・専門化した心理学の一部を逆に動物の行動に当てはめて考えるのは、さほど無理のないことではないかと思う。

岩井基樹は、「心というものの実態が今なお私にはよく判っていない。」と言っているが、ヒグマの学習・行動との関係からヒグマの心をつかみ取ろうとしているので、心の実態がよく判っているらしい。彼の理解は正しいと思う。

では、この際、私の考えを参考に供しておきたい。

記憶とは、自分でいろんな人の話を聞いたり自分なりにいろいろ考えることもそうであるが、その他に体験による記憶がある。すなわち、記憶とは、体験のことである。　記憶や意識というもの、そして心というものは、物理現象以外の何ものでもない。ということは、体験というものがすべての始まりであるということだ。胎芽時代の体験、胎児時代の体験、幼児時代の体験、子供時代の体験、青年時代の体験、壮年時代の体験、老年時代の体験それぞれが大事である。それぞれの体験によって「心」というものが形成されて育っていく。はじめから「心」というものがある訳ではない。

私は「心とは何か？」というテーマで、最新の量子力学を少し勉強してことがある。それをこの際紹介すれば、
http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/bunhohitu1.pdf

のペーパーである。

この内容自体私にとってなかなか難しいものであるが、結論としては、心の実態を科学的に言えば、上記のようなことではなかろかと思う。岩井基樹の理解は正しいと思う。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１７ヒグマのインテリジェンスフロー）

岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　昨今のアラスカの研究者によれば、ヒグマの知能はイヌと霊長類の間とされる。あの大柄で強大な威力を持つヒグマが、我々のよく知っているイヌを上回る高度な知能を有しているというのだから、やはり驚愕に値する。しかし、改めてヒグマのいろいろを思い起こしてみると、確かに通常のイヌより遥かに知恵が回り、ともすると狡猾な行動をとる場合がある。私が自信を持って繰り出した作戦はたびたび空転し、優秀なクマ撃ちでさえ裏をかかれ、深追いすると予想外の方法で逆襲される。高い知能に加え、学習年数の差もイヌとヒグマにはある。例えば、私が今育てている対ヒグマのベアドッグはジャーマンシェパードベースの大型犬だが、恐らく寿命は１０年ちょっとだろう。それに対し、野生のヒグマの生息年数は３０年近くである。いろいろな体験を積み危険を切り抜け、互い年数を生き抜いてきたヒグマは老獪という表現が当てはまる。』

『　昨今の私はイヌからの類推に加え、ときにヒトからクマを類推し彼らの心の動きを推理し、次に起こされる行動を読もうとしている。そして、その的中精度は決して悪くない。』

『　私がインテリジェントフローと呼んでいるものがある。それはヒグマの正体を捉えるときの要となるフロー（「個性形成の流れ」）である。』・・・と。

さて、そのインテリジェントフローであるが、岩井基樹の作成したものをベースに若干私なりの説明を加えて、皆さん方にご紹介しておきたい。

まず、ヒグマの知能は極めて高くそれに応じた個性が形成されるのだが、その個性は、成長段階においてどのような体験・学習をしたかによって千差万別で、ヒグマが私たち人間と至近距離で遭遇したときどのような行動をとるかということになると、単純なマニュアルが存在しない。一概には言えないということだ。そのヒグマがそれまでにどのような体験・学習をしたかによって千差万別であって、非常に異常というか非常に危険なヒグマが存在する可能性が十分ある一方で、非常におとなしいヒグマも決して少ないのである。したがって、私たちがヒグマと出会ったとき、個体識別をした上で対応しないといけないと

いうことになる。しかし、一般の人間にはそれが難しいので、結局は、人間社会全体として日頃ヒグマにどのような体験・学習をさせるかが基本的に大事なことになる。

第一に、ヒグマの誕生期においては、 胎芽時代の体験、胎児時代の体験が重要なので、健康で心優しい母グマを作らなければならない。それにはどうすれば良いか私には判らないが、そのことの大事を指摘しておきたい。
第二に、ヒグマの幼年期においては、若グマというのは無知で無邪気で好奇心旺盛なので、意図的な教育が必要で、悪い学習はさせられない。それにはどうすれば良いか私には判らないが、そのことの大事を岩井基樹は指摘している。
第三に、青少年期から壮年期にかけては、さまざまな体験・学習によってどんどん個性が形成されていくので、私たち人間の対応の仕方は大変難しい。執着・常習化・エスカレートを起こしやすいので、よほど注意しなければならないと岩井基樹は考えているようだが、どのような注意が必要なのか私には判らない。少なくとも私に理解できることは、一口にヒグマと言ってもそれぞれ個性が豊かなので、個体識別がきわめて大事であるということぐらいか。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１８冤罪グマ）

北海道では殺されるいわれのないヒグマがやたらに殺されている。このことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　「冤罪グマ」という概念がある。農地の作物を食べた訳でもなく、ヒトに危害を加えようとした訳でもなく、ただ罠の中のエサに引き寄せられ捕まり殺されてゆくヒグマのことである。』

『　ヒグマをむやみに殺すとむしろ人身被害の危険性が何故増してしまうか？　要するに、ヒグマが入れ替わるだけなのだ。往々にして元々いた問題性の薄いヒグマがそうでないヒグマに入れ替わり、密度も増す。』

『　ヒグマのように高知能で個性のばらつきが激しい動物に対しては種間錯誤ではなく、個体錯誤という考えを当てはめなければならない。つまり、「ヒグマAとヒグマBと間違えた」でも錯誤捕獲なのだ。なので、まずヒグマの識別をきちんとしなくてはならない。そのうえで、間違って捕まえたクマは、当然、無罪放免とならなければならない。これが、現在本州で普及しつつある奥山放獣とか学習放獣、あるいは私の呼ぶ教育放獣などの捕獲放獣である。』

『　従来、北海道のヒグマ駆除では、支離滅裂な捕獲が漫然と、しかも延々と行われてきた。その結果、北海道の一部エリアではヒトとヒグマの悶着・軋轢はこじれ放題にこじれて現在に至る。』

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その１９若グマについて）

ヒグマとヒトとの悶着を無くすためには若グマの教育が必要であるらしい。このことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマが常に経験や学習によって変化・成長する生き物だということがヒグマを理解する上での基本である。ヒトが作るヒグマ、人間環境という観点でいうと、「ヒトがヒグマに何を経験させ、どう学ばせるか」ということになる。もしそうだとすれば、学ばせる、教育するのは、ヒグマの成長のできるだけ早い段階にこしたことはない。この帰結が、私の若グマ追い払いに結びついている。ここ数年の私の専門はあくまで若グマだが、あの手この手で若グマがヒトにとっての問題グマ・凶悪グマとなる要素を先回りして消していく作業を行っている。』

『　若グマは経験が乏しいために、ヒトに対しても警戒心が薄く、またそれに旺盛な好奇心が働くために、ヒトや人里に対してかなり不用意で呑気な行動をとってヒトと問題を起こすことがある。』

『　山の中で不意に若グマに近づかれたヒトの多くは、襲われる、殺される、食われると咄嗟に思い込み、顔面蒼白で支離滅裂な行動に出る。その行動が若グマの好奇心に火をつけ、最終的にじゃれつきにエスカレートして、ヒトが思いもせぬ大怪我を負ったりするケースも出てくる。』

『　ほとんどの若グマは、我々が考え忌み嫌い恐れおののく凶暴・凶悪・どう猛とはほど遠い。まるで無垢な仔犬のような心を持っている。お互いに敵意のない者同士が山で遇い、傷つけ合ったり、無闇に恐ろしがったりする状況は明らかに不条理であると思う。』

・・・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２０私の相棒ベアドッグ）

岩井基樹は、現在、三匹のベアドッグを飼っているが、最初にベアドッグを飼い始めたのはちょうど６年前のことである。何故ベアドッグを飼い始めたのか？　このことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で以下のように述べている。

私はこれまで、自ら一介の動物としての威嚇・威圧力の他、撃退用のベアスプレーや轟音玉なる手なげの花火を用い、問題性の高い若グマの追い払いを行ってきた。しかし、もしヒグマの追い払いという行為を北海道に普及させるとすれば、私の方法そのままでは成り立ちにくい。リスクが大きすぎて、とても人に勧められないのだ。

考えあぐねていた私は、満を持してベアドッグの導入に踏み切った。直訳すれば「クマ犬」だが、クマ猟に使われる猟犬ではなく、現在では、クマを威嚇し人里やヒトから遠ざけるための犬、という意味で使われることが多い。ベアドッグは、ヒトとクマとの間に介在し、双方を守る犬である。

まだまだ日本では馴染みのないベアドッグだが、北米のベアッドッグの先駆的ヒグマ研究者キャリーハント氏の直系である長野のNPOピッキオでは、既にかなりの成果を上げている。決してSFながいの架空動物ではない。
（注：NPOピッキオ　http://npo.picchio.jp/　）

問題は北海道。ヒグマ相手の作業である。（注：本州のツキノワグマと北海道のヒグマとでは性質が違うので、北海道のヒグマに対応したベアッドグの種類とその教育方法も違ってくる。）

（中略）
２００９年２月、北海道・千歳に一頭の仔イヌが届いた。私が選んだのは、ジャーマンシェパード・ベースのハイブリッドウルフ、つまり狼犬。この選択には、アラスカにおける私の体験に加え、並々ならぬ思慮を費やしたが、どう結果を出せるかは数年後までわからない。私は、遥かなる希望を込めて、この小さな命に魁（KAI）と名付けた。

（　注：岩井基樹は、現在、魁と凛とノースというベアドッグを飼っているが、その様子については、岩井基樹のfacebookタイムラインをご覧いただきたい。
https://www.facebook.com/beardog2009
魁の弟子が凛でまたその弟子がノースらしいので、ノースの躾けはまだまだ不十分であるらしい。これからの躾けに期待したい。　）

目次に戻る！

野生動物の尊厳

この私のタイムラインで、1月２８日に、マタギ（漁師）がクマを殺していることについてのyoutubeの記事を紹介しました。
https://www.youtube.com/watch?v=OMFZBJmXKA8

マタギは生きていく糧として伝統のために命をかけて熊を殺している。動物愛護団体の多くの人の感覚としては野生動物を殺すなんてことはとんでもないということだろうが、このような考えは間違っている。では、野生動物を自由に殺しても良いのか？　そうではない。野生動物をむやみやたらに殺してはいけないのである。人間が生きるために野生動物を殺してそれを食べるというのは、昔から行われてきたことであるし、それは現在でも行われても悪いことではない。しかし、動物愛護の観点からいえば、野生動物は、できるだけ野生のまま生かしておいて、その尊厳を全うさせるべきである。

アイヌのイヨマンテでは、子グマを大事に育て、やがてそれは殺してその魂を神のもとに送り返す。その子グマは神と人間を繋ぐという大事な役割を負わされている。神は、アイヌが神に対しまたクマに対し畏敬の念を持っていることを理解し、安心して、岩井基樹いうところの「神居型ヒグマ」が森に繁殖するよう自然を整えるのである。「神居型ヒグマ」というのは、野生動物としての「尊厳」を生きていると思う。

「ヒグマの尊厳」について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　野生動物の餌付けというのは、非常に多くの側面を持っている。ヒグマの場合、単純な被害としてのヒトとの悶着・軋轢は社会の問題だが、人類の滅亡に関わるかも知れない生態系の撹乱という問題もあるだろうし、哲学的な方面からいえば、「尊厳」という問題にも引っかかってくる。』

『　家畜のように暮らすヒグマに、「バカタレ」と言いたくなる私の気持ちとしては、その餌付けがヒグマのという野生動物の「尊厳」を失わせるような行為だからだ。そういうヒトの行為に甘んじて暮らすクマに対しての腹立ちも無くはないが、野放図に餌付けを行うヒトのありように反駁（はんばく）とも落胆ともつかない気持ちが湧き上がる。』

『　かなり前のことになるが、石狩川と湧別川の稜線の北見峠で、餌付けされたキツネがあって、そのキツネは奇形なのか後天的にそうなったのか判らないが、犬歯があらぬ方向に向いて曲がって生えていた。ちょうど子育てをしているらしく、巣穴を突き止めて観察した。犬歯の曲がった母キツネは、時折観光客に貰った食べ物をいっぱい口にくわえてその巣穴に戻ったが、そこには数頭の小キツネたちが腹を空かせて待ちかねていて、競うように母キツネの運ぶお菓子や何かを食べた。私は、冷然と観察するはずだったのに、あっ

さり冷静さを欠き、目頭を熱くしその光景から目を背けた。見ていられなかった。犬歯の曲がった母キツネの生い立ちや、その母の育てる小キツネらの行く末を思うと、無性に悲しくなった。』

『　だから、「尊厳」というのは哲学といえば哲学的だが、要するに、純然とした感性の問題かも知れない。しかし、「この感情無くしてクマなどできるか」という気概とも言い訳ともつかない気持ちが私にはある。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２１ヒグマは人の暮らしを映し出す鏡）

人間環境について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で以下のように述べている。

近代以降、ヒトの文明は自然環境を急速に変え、ヒト自体の暮らしっぷりもずいぶん変わった。その変化になるまで同調するようにヒグマは生活パターンや生存戦略を変えてきた。いわゆる自然環境に加え、ヒトの暮らしっぷりの方を人間環境と呼んでいるが、ヒグマとヒトとの悶着・軋轢には、むしろ人間環境が影響する。つまり、その時代その地域のヒグマは、いわばそこに暮らすヒトが作ったヒグマである。だから、見知らぬ土地を訪れた時、そこのヒグマの行動パターンを調査すると、だいたいそこのヒトの意識や暮らしっぷりが判るし、逆に、そこのヒトの暮らしっぷりを眺めていると、その周辺のヒグマの習性や危険度などもだいたい想像できる。また、例えば、「最近ヒグマの行動がおかしいぞ」となった場合は、「ヒトの心や暮らしで何かおかしいところは無いか？」と疑ってみるといい。つまり、昨今よくいう生態系・種の保存・多様性という生物学的な意味で、ヒグマというのが特別重要な野生動物だとは思わないが、ヒトの暮らしを映す鏡のような動物である。もっといえば、ヒトの心を映し出す鏡である。その点ではきわめて重要な存在だと思う。

つまり、熊の方が何も変わらなくても、人間環境が変わるだけで、ヒグマは害獣にも財産にも、危険にも安全にも変幻自在に姿を変え得るのだ。今こうして、自分が知り得ることを限られた範囲でいろいろ記述している私だが、５０年後、その内容の一部は無用と化し破棄されなければならない。５０年後には５０年後のヒトの暮らしっぷりがあり、ヒトの心がある。ヒグマを含めた自然への理解はヒト自身への理解とともに今より深まり、恐らく、現在あるヒグマ問題の多くは解消し、北海道のヒグマはヒトの社会に受け入れられて暮らすようになるだろう。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２２荒くれグマの復活）

最近、荒くれグマが復活しつつあるらしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　開拓期以来の北海道でも概ね北米と同様のパターンでヒグマは変化し、少なくとも近年までに荒くれグマらしき個体はむしろまれになっていた。ところが、つい最近、怪しげな予兆が北海道各地で現れている。「牛殺し」がそれだ。私の調査エリア周辺でいうと、２００９年5月、上川町で牛舎の牛がヒグマの食害に遇い、情報開示等の対応が後手を踏んだため被害が拡大して８月までに７頭の牛が同一と思われるヒグマに襲われ死亡した。すべて牛舎内の牛だった。』

『　同年８月、奇しくも上川で７頭目の牛が被害に遭ったちょうどその頃、北見峠を挟んだ遠軽町白滝で非常に似通った牛殺しが起きた。白滝では少なくとも１０年このような事例は起きていない。白滝の加害グマは、前掌幅１５㎝の若グマのオス。年齢は5歳前後だろうか。やはり牛舎の中に侵入し、牛の肝臓だけを綺麗に食べていた。』

『　そして、同年８月末日、白滝の隣の丸瀬布で牛舎に接近するヒグマが確認された。これに関しては、これまでのところ幸いにして牛食害に至っていないが、近年のヒグマの行動としては若干違和感を感じる。』

『　つまり、２００９年、山で繋がった四つのエリアで牛というキーワードで同様の珍しい事件がヒグマによって起きているということになる。これらのケースに対して原因はまだ特定できていないが、牛の死骸の処理、過度な箱罠依存などなど、いくつかの理由は上がっている。恐らく、複数の原因が複合的に作用してこれらの牛殺しが起きたのだろう。』

『　ここで重要なのは、北海道のヒグマの行動パターンがどういう方向に変化しつつあるか、あるいは予兆を見せているかというところである。四つの事例が単なる偶然とするには、ちょっと無理があるように感じられるが、仮に、何らかの理由で「荒くれグマ復活」というようなシナリオが人知れず北海道で進行しているのであれば、当然ながら今後、人身被害の危険性に関しても十分懸念を要する。私自身は漠然と不気味な感じを受けている。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２３攻撃型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、攻撃型ヒグマとは？　攻撃型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマの遺伝子形質は無視できないにせよ、高知能なヒグマにはそれ以上に経験・学習などの影響が色濃く表れる。性質・性格など習慣的に非常に広い個性のばらつきを示すのがヒグマだが、人への警戒心・忌避心理とともに低く、攻撃性が目立つ個体がごく稀に生ずる場合がある。』

『　万が一このタイプのヒグマが現れた場合、通常の悶着回避のセオリーがほとんど利かない可能性がある。』

『　写真家・星野道夫の死、あるいは史上最悪のヒグマ事件といわれる三毛別など、過去のヒグマによる大それた事件・事故には、およそこの執着・常習化・エスカレートが深く関わっている。つまり、凶悪とか最悪とか呼ばれる事件を引き起こすはるか以前に、そのクマには前兆・前触れが必ず見られるものだ。前兆を感知したら集中的にその個体をマークし、警戒態勢をしきながら、場合のよっては速やかに捕殺方向で動く必要がある。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２４防衛型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、防衛型ヒグマとは？　防衛型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　行動そのものは攻撃型と似通っているが、その行動原因があくまでも防衛本能によるヒグマの場合、攻撃型と明確に区別してこのように定義する。つまり、行動は問題があるが性質には異常性が無い場合だ。人身被害が起こるには、若グマのじゃれつきを除き、通常はヒグマがヒトに対して攻撃性を発揮することが前提となるが、じつは何らかの防衛本能が攻撃性として現れる場合が大半だ。ヒト側がヒグマを追いつめたり、切迫させたりして、逃げられないとヒグマが感じた時に咄嗟に起こされる攻撃である。』

『　手負いグマや小連れの母グマが怖いといわれるのは、単に自分や子供を防衛しなくてはならない不利な状況に置かれているからだ。』

『　しかし、その場合でも、こちらからさらに追いつめ切迫させない限り、まずヒトから逃げるのが普通だ。』

『　手負いグマや小連れの母グマの攻撃性は通常一過性のもので、逃げ切って時が経ち、傷が癒えるとともに薄らいでゆくと考えられている。突発的で異常な心理状態での攻撃そのものは攻撃型のヒグマ以上かも知れないが、真性の攻撃とはいえない。』

・・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２5悠々神居型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、悠々神居型ヒグマとは？　悠々神居型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマの中には非常に悠々として余裕を感じられる個体が存在する。それは通常オスの壮年成獣に見られ、相当切迫した状況でヒトと遭遇しても、咄嗟に身を翻して逃げるものの、ある距離でこちらを振り返り、その後に悠々と歩いて立ち去るなどのおおらかな行動パターンを持っている。ヒトとの接触を極力避けて用心深く行動する一方で、このような行動を出会い頭の営林署の大型ダンプに対してまでとり、派手にならし続けるクラクションに臆すること無く悠然と歩いて姿を消したりする。時折、真昼の稜線筋の草原で寝ころんで遊んでいるあたり、その神経と心理は私にも量り知れず深遠な感じを与える。もしアイヌの時代にこのヒグマがその山塊にいたら、きっと山の守り神（キムンカムイ）として敬意と畏怖をもって崇められたことだろう。』

『　この種のヒグマはその山塊で最も優位な側の個体であることが多く、対ヒグマについても、ヒトに対すると同様一種の自信と余裕を持っている観がある。論理的に考えれば、このクマはヒトの類型を見極めるに至っている。命を脅かす危険なハンターとそうでない釣り人・山菜採りを見分けて行動を変えているのだ。』

『　私の観察からは、このヒグマが徘徊してくると、そのエリアの若グマ、メス熊は雲隠れするように忽然と感知できなくなることが多い。』

『　オスでもメスでも、通常この手のヒグマはヒトと一定の折り合いをつけて長年暮らしてきた個体であり、また、ヒグマの社会では大きな存在となっているので、このヒグマを無闇に殺して欠落させることは、ヒトおよび人里のリスクマネージメント上、通常マイナスしか働かない。そういう悠々神居型ヒグマは大事にしなければならない。総じて穏やかで威風堂々とした山の守り神だ。』
・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２６忌避型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、忌避型ヒグマとは？　山塊残留型ヒグマのことであるが、その忌避型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　北大雪山塊には、年間を通じて人里から離れた奥山で暮らすヒグマがいる。実際このタイプのクマが年間を通じて人里に降りてこないかどうかは立証されていない。が、状況証拠からは、少なくとも一部は人里で被害をもたらしていないクマだと考えられる。このタイプを、私らは単純に山グマと呼んでいる。山グマは、８～９月にかけても比較的山の稜線筋に生活し、デントコーンを含んだ糞などは一切残さない。』

『　ヒトとの接触は営林署の職員、登山者など特定のヒトに限られ、その接触回数も人里周りのヒグマに比べて極端に少なく、日常的にヒトの姿やクルマ、人家を目にしていないヒグマといえる。北大雪では各林道最奥の尾根筋付近のヒグマ、平山方面・標高１６００mより上の高山帯、ハイマツの生えたコケモモ群生地に８～９月に活動するヒグマの一部がこの忌避型ヒグマに属するだろう。何故このヒグマがこのような生活を送るようになったのか？　何らかのテリトリー的な力学からか、忌避教育がなされたからか、そのヒグマの気質からなのか、それとも単なる偶然か。そのあたりのことは不明だが、高山帯の植性の成長が早く、新芽・草本から木の実までの端境期が短いこと、また、その端境期が麓の人里の農作物の食べ頃とずれていることも影響しているのだろう。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２７疾病型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、疾病型ヒグマとは？　その疾病型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　野生のヒグマの生存年数は２０年から３０年前後といわれている。その間には偶発的な事故で怪我を負うもの、そのけがが古傷になるもの、虫歯になるもの、片目をつぶすもの、そして各種疾病にかかるものなど、さまざまなケースが考えられる。』

『　そして、人間界で現代病に類する「ヒグマの現代病」というのが存在する可能性が、特に北海道のヒグマの場合はあるように感じられる。倭人が北海道に侵入して以来の急激な人間環境の変化が原因だ。この急激な変化に対応すべく食性と生活習慣の変化を起こして順応してきたヒグマだが、脳と身体に歪みが生じていないか、疑ってみる必要がある。』

『　ヒグマの現代病はもちろん、疾病全般に関して、あるいはその疾病がどのような問題を引き起こすかなどの研究は、残念ながらまだ進んでいない。疾病の中で特にヒトとの悶着に直結するものが、精神性疾患の類と老人性の脳障害に関わるものだ。』

『　仮にこのタイプのヒグマが現れた場合、攻撃性同様、ヒトに対する警戒心が希薄になっているため、放置すれば人身被害に結びつきやすいが、捕殺・射殺に関しては、むしろ容易になる可能性が高い。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２８餌付け型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、餌付け型ヒグマとは？　その餌付け型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　餌付けグマというのは執着・常習化・エスカレートを起こし攻撃型に変化する可能性があるので、まず「餌付けを避ける」というスタンスがヒト側に必要不可欠だ。餌付けの定義については別に固定的に決まっている訳ではない。農地被害やゴミ箱荒らしは被害で

あって餌付けではないという人も中にはいるが、そのスタンスでは矛盾だらけでまともな議論ができなくなるので、私は、「ヒトの意図・思惑に関わらず、ヒグマが人為物を食べて行動を変化させれば、それを餌付けという」という定義で考えている。実際、人為物を食べてその味を覚えてしまったヒグマにとって、それが誰かの意図かどうかは全く関係ない。例えば、釣りに出かけた私が河原で車中泊をしたとする。車中泊というのは、クルマの中にシュラフを敷いて窮屈に眠ること。その時、夕飯の鍋の残りをクルマの外に置いたまま、「明日の朝また食べよう」と言って眠ったとすると、仮に深夜に現れたヒグマにその鍋をペロリと食べてしまえば、餌付けとなる。』

『　私の定義からすれば、農作物やゴミ捨て場の生ゴミに依存して出没する通常のタイプから、釣り人やキャンパーの捨てたゴミの味を偶然知ってしまったケースの他、交通事故で斃死したシカの死体に餌付く個体、あるいは意図してヒグマにエサを与える観光客の例なども、すべて餌付けに含む。』

『　食べ残しの鍋ではないが、実際に、あるハンターの指導のもと人里内に残飯を置いてクルマで待ち構え、夜になって案の定そこに降りたヒグマの写真をフラッシュまでたいて撮った愚かな例が私の身近にある。知床でも大雪でも似た例があるという。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その２９人慣れ型ヒグマ）

岩井基樹は、ヒグマには、攻撃型、防衛型、悠々神居型、忌避型、疾病型、餌付け型、人慣れ型という七つのタイプがあるという。ここでは、人慣れ型ヒグマとは？　その人慣れ型ヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　最近の知床で増えている第二世代のクマ、「新世代ベアーズ」などといわれるヒグマがこのタイプの代表だ。アラスカ州などのヒグマ観察・観光の場所では人を全く恐れないヒグマがごくごく普通に存在するが、知床の一部地域ではその兆候が見られる。あまりに多くの観光客に毎日触れ、カメラマンに取り囲まれ、人に慣れ、恐れなくなってきているタイプのヒグマだ。この新世代タイプは、２０００年夏、同じく観光客の多い大雪山系の一部エリアにも現れた。』

『　ヒグマの学習には概ね三つの方向性がある。誘引され接近する、警戒し忌避する、誘引・警戒のどちらもなしに無反応になる。この三つだ。このうち、最後の無反応をヒトに

対しったのがアラスカのデナリやカトマイに存在するいわゆる観光グマだが、知床・大雪の新世代ベアーズはそれに近い。このクマが好ましいか好ましくないかというと、少なくとも、しっかりヒグマとヒトが管理された観光エリアなら好ましい。特にヒトの管理が重要で、ヒト側が一定のスキルを持ち一定のルールを守りさえすれば、一定の安全を確保しつつ観光として成り立つ。ただ、このクマはヒト全体に無差別に無警戒なため、そこにいったん人為物が絡んでしまうと、一気に観光客全体が危機な状態に陥る可能性がある。その点では、非常に脆弱な状態だともいえるだろう。』

『　知床は善くも悪くも特殊な地域といっていい。いわゆる知床というのは国立公園であり、現在は世界遺産でもある。ゴミを捨てない、エサを与えないはもちろんだが、念には念を入れ、クルマから外へ出るときは缶ジュース、お菓子、弁当などは持ち歩かない。そこまで気を配る必要があるかも知れない。仮にだが、知床でヒグマを見たいが化粧や香水を落とせないというのであれば、残念だが動物園のヒグマで我慢すべきだろう。私個人の意見としては、北海道の知床辺りで少なくとも現在、ヒトの存在を気にせず近距離で振る舞うヒト慣れグマは決して容易に作らない方が良いと思う。それは、そのクマに問題があるのではなく、そのクマの近くにいるヒト側に問題があるからだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３０ヒグマとビタミンD）

ヒグマにとってビタミンDは注目すべき栄養素であるらしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマにとっての完全無欠の食物・サーモンは、単に８月以降の食い溜めの食糧として重要なだけでなく、いくつかの隠された秘密がある。この点での倭人侵入以来の急激な変化、つまり、サーモンの欠落が山塊ヒグマの身体と脳にそれぞれ及ぼす悪影響について、指摘をする必要がある。ただし、これらに関しては科学的に立証されていない。あくまで私の論理的イマジネーションとして書かせてもらう。』

『　きわめて重要な点は、サーモンの持つ栄養素の一部、注目すべき栄養素がビタミンD。ビタミンDは体内ではほとんど生産されず体外から摂取しなくてはならない栄養素だが、魚類の中でもシロザケは、このビタミンDを抜群に多く含む。ビタミンDの体内での主な働きはカルシュウム、リンの吸収促進なので、これが欠乏すると体内へのカルシュウム・リンの吸収が阻害され、成長期なら骨格類の発育不全を起こす。このことから、単純にひとつの可能性が浮上する。サーモン欠落山塊でのヒグマの小型化、あまり考えたくな

い仮説だが、北大雪などのサーモン遡上が人為的に欠落した典型的な北海道の山塊で、もしかしたら起こっているかも知れないヒグマの変化がこの小型化だ。』

『　北海道の場合サーモンは、太平洋に面する地域では通常5種類のサーモンが初夏から秋にかけて時期を違えて遡上を開始する。ユーコンなどの大陸河川では２０００kmの上流まで遡上するサーモンがあるが、無数にある中小河川では最大に遡っても１００kmから２００kmというところだろう。小河川をピンクサーモンが遡る場合など、ほんの数kmで止まる場合もある。これらのサーモンの性質からすると、サーモン補食に関しては海岸近くが断然有利ということになる。』

『　ビタミンDの欠乏による骨格類の発育不全ばかりでなく、軟化、つまり骨がもろくなるということも同時に起き得るだろう。北海道で骨折したらしきヒグマに私は遭ったことがないし、外見で見る限りヒグマが容易に骨折などしそうには見えないが、そんなヒグマにも、ひとつのもろさが露呈しやすい場合がある。それが歯だ。北海道では虫歯になるヒグマが結構存在すると調査データがあがってきていて、この仮説と一応整合性がとれる。人知れずヒグマが虫歯になってもかまわないと思うのは早計だ。歯というのをヒトを怖がらせたりする道具ではなく消化器官のひとつとれば、虫歯の進んだヒグマは食物偏重・栄養欠乏を起こしやすく、また、単純に虫歯の痛みからイライラしているヒグマだっているかも知れない。そして、さらに、ビタミンDの不足がカルシュウムに関係しているとすると、ヒグマたちにカルシュウム欠乏の症状が現れる可能性もある。ヒトの場合はイライラ、神経過敏などの神経症、自律神経失調症がその症状だ。つまり、サーモンの特筆すべき栄養素ビタミンDが欠乏し、ヒグは小型化を伴いながら、身体の一部に不都合を抱えつつイライラと神経過敏な状態へ変化するかも知れない。この方向で変質した小型のヒグマに比べれば、大柄でおおらかなヒグマの方が扱いやすく、ヒトにとっての危険性も遥かに小さいだろう。ビタミンDはサケの他にはキノコ類に含まれるので、山塊のヒグマはキノコをたらふく食べてもらいたいものだ。間違ってもイライラした神経過敏症のヒグマなどには山中で遭いたくない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３１ヒグマの発育とサーモン）

サーモンというのは、仔グマ・若グマにとって単なる食糧や栄養素というだけでなく、その発育に大きな役割を持っているらしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマは、浅瀬で泳ぐサーモンを手で押さえ込んで捕まえたり、山上湖で潜って捕まえたり、場所によっては小滝でジャンプするサーモンを空中でくわえてキャッチしたり、それはそれはさまざまな場所でさまざまな捕まえ方をする。その捕獲方法については、それぞれのヒグマが得意技を持っていて、むしろ趣味趣向に走ってサーモンを捕まえているように感じられることも多い。』

『　仔熊・若グマは、サケを探すとき、見つけたとき、捕まえようとしているとき、捕まえたとき、表情を豊かに変える。つまり、精神上の遊びの部分が絡んで脳が刺激され、感情がめまぐるしく変化しているということなのだ。』

『　猫じゃらしに飛びつく猫や、弾むボールを追いたがる犬に見られる、要するに狩猟的な好奇心だ。牧草ロールを転がしたり、急斜面も滑り降りたり、時間をおいて自分の糞の上にトッピング糞を落としたり、ヒグマの遊び心は実にさまざまでなかなか奥深いが、こと動的なものへの狩猟本能を満たす遊びとなると、遡上サーモンが担う部分が大きいように思う。』

『　高知能なイヌ、ヒグマ、ヒトとなると、遊びによって脳が発達し、また、遊びによって脳の活性が保たれる部分が大きいように感じられる。』

『　恐らく、野生と動物園のヒグマで脳の発育・脳の活性・機能の状態をMRIにでもかけて精密検査すれば、明らかに違いが出てくるだろう。もしかしたら、動物園のヒグマの一部には萎縮した脳も発見できるかも知れない。私が、若グマの性質・性格分析で、どうして「よく食べ、よく遊ぶ」身体を心身共に発育順調と単純に捉えるかも、ここに理由がある。もし、仔グマや若グマの遊びとか脳の活性とか好奇心とか脳の成長ということを馬鹿げていると思う人がいたら、自分の子育てで類推してみるといい。脳への刺激を与えず、単に合理的なエサ（食事）だけ与えて毎日単調な環境で育てたらどうなるか。それが、どれだけ将来に影響することか、少しは危惧も湧くだろう。昨今では知育などといわれ凝（こ）ったようなおもちゃを与えたりするが、私は、子供を自然の中に連れて行って虫や動物、いろいろな音や匂い、風や光などに触れさせるのが、もっともいい知育だと思っている。』

・・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３２ヒグマの尊厳）

尊厳とは何か？　私は以前に尊厳の哲学を勉強し、一連の記事をブログに書いたことがあります。

http://iwai-kuniomi.cocolog-nifty.com/blog/2010/10/post-1266.html

「蒼き狼」とはチンギスハーンのことですが、オオカミは実に尊厳の高い動物です。イヌやサルはボスの顔色をうかがいながら生きていますが、オオカミは、 ボスの存在を充分意識しますが、それは周囲の環境の一部であり、けっしてボスの顔色をうかがいながら自分の行動を決めないのです。 ですから、私は、オオカミを見習って、人も国も尊厳ある生き方をしたいものと考えます。しかし、私のそういう考えは、ヒグマの尊厳ということまでは考え及んでいませんでした。どうもヒグマの尊厳にも学ぶ点があるようです。私の息子・岩井基樹はヒグマの尊厳ということを考えているらしく、そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べています。すなわち、

『　野生動物の餌付けというのは、非常に多くの側面を持っている。ヒグマの場合、単純な被害としてのヒトとの悶着・軋轢は社会の問題だが、人類の存亡に関わるかも知れない生態系の撹乱という問題もあるだろうし、哲学的な方面からいえば、尊厳という問題にも引っかかってくる。』

『　家畜のように暮らすヒグマに「バカタレ」と言いたくなる私の気持ちとしては、その餌付けがヒグマという野生動物の尊厳を失わせるような行為だからだ。そういうヒトの行為に甘んじてクマに対しての腹立ちも無くはないが、野放図に餌付けを行うヒトのありように反駁（はんばく）とも落胆ともつかない気持ちが湧き上がる。』

『　かなり以前のことになるが、石狩川と湧別川の稜線の北見峠で、このタイプのキツネが遭って、そのキツネは奇形なのか後天的にそうなったのかわからないが犬歯があらぬ方向を向いて曲がって生えていた。ちょうど子育てをしているらしく、現在若グマにやっているストーカー行為を行って巣穴を突き止めた。犬歯の曲がった母ギツネは、時折観光客に貰った人為物を口いっぱいにくわえてそこに戻ったが、そこには数頭の小ギツネたちが腹をすかせて待ちかねていて、競うように母ギツネの運ぶお菓子や何かを食べた。私は、冷然と観察する筈だったのにあっさり冷静さを欠き、目頭を熱くしその光景から目を背けた。見ていられなかった。犬歯の曲がった母の生い立ちや、その母の育てる小ギツネらの行く末を思うと、無性に悲しくなった。』

『　だから、尊厳というのは哲学といえば哲学的だが、要するに純然とした感性の問題かも知れない。しかし、「この感情無くしてクマなどできるか」という気概とも言い訳ともつかない気持ちが私にはある。』

・・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３３ヒグマ観光）

 次の画像はサーカスで演技する熊であるが、自然の中に暮らすクマとは違って、クマの尊厳も何もあったものではない。
https://www.youtube.com/watch?v=nqphZBlnXUA

次の画像はサーカスのテントの中ではなく野外で撮影したものであるが、これも本質的にはサーカスで演技する熊と何ら変わりはない。
https://www.youtube.com/watch?v=4R0zvgyN1Z0
https://www.youtube.com/watch?v=9nSWc43TLaI

こういうのとは違って、自然の中に暮らすヒグマを間近かに見るヒグマ観光というのがある。アラスカ州では、ヒグマ観光が結構盛んで、そのことについては Derek Stonorovの書いた「クマとの調和したくらし」という報告書に詳しく載っている。
http://www.oshima.pref.hokkaido.jp/os-ksktu/kuma/LivingInHarmonyWithBears_J2%2017p-37p.pdf

その様子は、htb（北海道テレビ放送）で紹介されたことがある。
http://www.htb.co.jp/shizen/archives_060902.html

アラスカ州の中でも特に「マクニール川自然保護区」の「ヒグマ観光」が有名なので、それを次ぎに紹介しておきたい。1日10人しかこの保護区に入ることが出来ないように制限され、ガイドの細かい指示のもと、観光客は厳格にそのルールを守らなければならない。人が絶対にエサを与えず、ヒグマを脅かす行動を控え、ヒグマに人の存在をそっと知らせる事で無防備で警戒心のないヒグマの観察ができる。このヒグマの聖域で、これまで一度も人が襲われ怪我をした事はないとのこと

https://www.youtube.com/watch?v=-rh-5TQOzJU

そういった「ヒグマ観光」について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマがヒトに対して無関心・無反応というのは心理的力学が働いていない状態のことで、ヒグマとヒトは一種無関係という関係である。ヒグマに限らず、特も害もないと学習すれば、およそ野生動物というのはそのものに対して無関心・無反応に変化していく性

質を持つ。この状態を作り至近距離でヒグマを観るというのが、非日常として提供される管理エリアでの「ヒグマ観光」の可能性だ。』

『　例えば、マクニールには観光ガイドの表紙になるような、非常に有名な「ヒグマ観光」のスポットがある。そこを訪れると、まあ決められたルールを厳格に守ることに比べれば、ヒグマそのものに対してはあまり神経質にならずにいられる。』

『　要するに、周りの人と違ったことをしないということ。その日の周りはもちろんだが、前日の観光客とも前々日の観光客とも一年前の観光客とも、とにかく、違ったことをしない、目立った行動をとらないということが何より重要な要件となってくる。だから、仮にガイドの指示が聞き取れなくても、とにかく周りと同じように動けば安全だ。』

『　観光地として、観光客とそこのヒグマに作られた一定のルールが支える場所、私自身は、こういう場所があっても大いに良いと思っている。ただ、ヒグマそのものよりそのルールに神経質にならざるを得ないスタンスには、正直私個人はあまり馴染めない。「やりとり」の緊張感が不在のヒグマとの関係というのが、私の経験上、どうしても違和感を持たせてしまうようだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３４ヒグマ情報）

ヒグマの活動情報は、ベアカントリーに入る際の必要条件である。したがって、ベアカントリーに入る際にはできるだけヒグマの活動状況について下調べをしておく必要がある。そのヒグマの活動状況について、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ベアカントリーに入る人は、まずヒグマという野生動物がいかに自分の身近に存在するかということを、まずしっかり意識する必要がある。北海道に見るヒグマによる人身事故のうち、多くはこの段階でまずつまずいている。北海道にはヒグマが生息する、これを否定する人はまずいない。しかし、それを頭で曖昧に知っていても、「まさかこんなところにヒグマがいるわけはない」「まさか自分がヒグマに遇うことは、」とたかをくくってしまいがちなのだ。』

『　例えば、ヒグマの生息密度が高いとされている知床半島で、知床五湖周辺に１０頭前後のヒグマが活動する時期があると判明し、その状況は研究者によって「驚くべき密度」と表現される。しかし一方、国立公園でも世界遺産でも鳥獣保護区でもない私の調査エリ

ア、北大雪山塊・丸瀬布エリアなどで、人里とその近隣にそれよりもはるかに高い密度でヒグマが活動する時期が存在する。局所的は、キャンプ場に隣接する比較的狭いデントコーン農地に、一晩に三頭以上のヒグマが降りることさえ珍しいことではない。』

『　北海道では、これらの情報はほとんど開示されていない。正確に言えば、各々の地域の行政に開示すべき情報を収集できていないという大前提で我々は考えなければならないが、仮に正確なヒグマの情報開示がなされれば、驚くほど意外な場所に意外なほどヒグマが活動していることが示されるだろう。』

『　北海道の国立公園の双璧、知床国立公園（知床自然センター）と大雪国立公園（ヒグマ情報センター）などのヒグマ情報収集能力は１００％でないにせよ信頼に足る。』

『　また、一般地域であれば、市町村の鳥獣行政にシカの駆逐状況とヒグマの活動状況を事前に問い合わせておくと有利な材料になる。
（岩井國臣のコメント：もし市町村の鳥獣行政部門に問い合わせても要領を得ない時は、「羆塾ひぐまじゅく」のfacebookタイムラインに質問すれば、誰かが無いか参考になることを言ってくれるかも知れない。https://www.facebook.com/beardoghandler?fref=photo　　）
』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３５ヒグマについての学習）

ベアカントリーに入る際、事前に、羆についての十分な知識・理解を得ておく必要がある。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　いろいろな人とベアカントリーで活動していると、ヒグマの知識・理解が欠如し危険な行動を平気でとる人がいる一方、同様にヒグマを知らないために万事ビクビクと臆病に神経過敏に振る舞う人がいる。どちらのタイプの人も、山に対してヒグマに対して自然に対して、横柄なのだ。』

『　いちばん良いのは、信頼できるエキスパートとともに行動することだろう。その人物からいろいろを学び、行動から盗み、自分でも考えながら実践でスキルを身につけていくのがベストだ。決して、ベアカントリーに踏み入るなということにはならない。』

『　北海道の場合、特殊なエリア・特殊な研究機関以外の公、特に地方の市町村ではほとんどヒグマの実像や活動状況を把握していない。それればかりか、把握の努力自体ほとんどされていないので、発せられる情報・注意喚起・指示を信頼する根拠そのものが実はかなり希薄なのだ。これは一概に各所管の怠慢という訳でもなく、これまでのところ北海道は野生動物管理の後進地域といえるかもしれない。』

『　日本という国は自己責任の乏しい国だと言われる。実際にそうだと私も思う。幅広い人が自己責任を発揮するためには、もちろん各々の努力も必要だろうが、発揮できる環境を公が整えることも必要だ。その最低条件が「情報の収集と開示」と「正しい対処方法の普及」だが、その点が総じて日本の公には欠けてきた。少なくとも自然と関わるいろいろな活動について、管理責任型から自己責任型にシフトするのいいと感ずるし、北海道でも、悪いしきたりは打破して一からこの強力な野生動物と対峙してもいい時期だと思う。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３６五感の開放）

事前の情報収集やら学習が終わっていよいよベアカントリーに入った場合、大いに楽しみたい。そのためには、ゆったり歩き五感を開放して、ベアカントリーの地物のほか音や光や風にもきめ細かい観察に心がけたいものだ。そういう場数が増えていくとやがてベアカントリーのエキスパートになるだろう。そうなればもっとも豊かな人生を送ることができると私は思う。私などはもう年寄りだしそうはならないが、そういう人生が若い頃の夢であった。その「五感の開放」ということについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　以前、あるヒグマの研究者と自宅の庭でランチをとったことがある。他愛のないことを笑い転げながら話していると、彼の動作が止まり、一瞬の間をおいてひとこと言った。「今の・・・・クマゲラがいるんだね。」確かにクマゲラが飛翔しながら鳴く独特の声だったが、谷の奥のほうからようやく聞こえるほどの音として届いただけ。私の脳にも届いていたが、実際、耳を澄ませて聞こうとしても難しいほどの音だった。現にそれを聞いた人間にはそこにいた半数以下だった。つまり、五感というのは必ずしも意識して使おうとしなくても、勝手に敏感にいろいろ尾w捉えるように熟練することができるものなのだ。研究者は、遠くから届くクマゲラの声をちょっとした違和感として捉えた筈だ。そして、瞬時に考えを巡らせ判断した。彼は１００m離れたササ薮でクマが半歩動いても気がついただろう。』

『　だから、ベアカントリーを歩き慣れている人ならば、気を張りつめて一生懸命になっていなくても、勝手に一部の重要な音や光は、それがいくら些細でも脳に届く。その届いた情報から違和感を感じる情報を瞬時に絞って、場合によっては即リスクマネージメントに生かすのだ。』

『　かの研究者は学生時代からベアカントリーを歩き回ったエキスパートで、ある意味特殊だが、神経のメリハリとはだいたいこういうことである。このメリハリを正しく覚えてゆくことで、殺伐と恐怖心やら不安感で疲労困憊し歩いていた山が、豊潤で機微に富んだ楽しい山に変貌するだろう。ヒグマが暮らす山その森を安全に、なおかつより自由に楽しめるようになる。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３７勘を磨く）

今西錦司ほど数多くの山に登った人はいない。今西錦司は京都大学山岳部の私の尊敬する大大先輩であるが、彼の凄いところを私はいろんなところに書いてきた。その中で、電子書籍「１００匹目の猿が１００匹」の第１１章に「今西錦司、直観を語る！」というのがある。
http://honto.jp/ebook/pd_25231954.html
http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hadou12.pdf

直感と直観とは違うがそこに紹介したように、今西錦司は、直観について次のように言っている。すなわち、

「山に行くことは，私にとって，なにかしら、直観を磨く上で役に立っている。」

「ひと頃の私は，渓流釣りにこっていた。渓流釣りは足で釣るものだといわれる。自分で歩いて魚のいるところを、まず見つけなければならない。見つけるといっても魚の泳いでいるところを見つけるのでない。魚の姿は見えないけれども，魚のいるところを見つけるというのであるから，そこに心眼というか勘というか，つまり直観のはたらく余地ができてくる。」・・・と。

岩井基樹もどうも直観が働いているようで、直観について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　私は北大雪の山で数多くのヒグマを見、状況が許せば写真に収めている。それは、私がこの山を歩き回りヒグマを調査しているからだろうと思われるかも知れない。もちろんそれも加担はしているが、むしろ違うところに理由がある。それは「勘を磨く」ということだ。』

『　ヒグマを見つける能力というのは、その山のいろいろな観察と分析もそれなりにあるが、要はヒグマの眼（め）、ヒグマの勘なのだ。』

『　五感を開放して山を歩いていると、周辺の植生や地形から、見えもしないアイヌネギ、タラン、キノコ、ウドの群生が半ば想像できる感覚になる。「あの沢の斜面の落ち口には絶対にあるな」と。それで実際に行ってみると、見事なアイヌネギ、タラン、キノコ、ウドの群生が見つかったりするようになる。これが勘だ。』

『　山菜以外で私の範囲をいえば、釣りではマス眼というのがある。実際に流れの中の大きな魚が視力で見える訳ではないが、目の前にある川の流れの音、匂い、流速、変化、濁り、天候そしてその季節の気温や風そして風景などから、「ああ、あの岩の頭だ」と勘が働くわけだ。』

『　現場のいろいろを敏感に捉えて勝手に働くヒグマ眼とヒグマ勘。読みと眼と勘、これらが揃うと見えないヒグマも意外と見えるようになってくる。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３８ベアウォッチングの勧め）

ベアウオッチングというのは最高の趣味だと思う。真の意味で「自然との共生」を生きることができるからだ。それができる北海道の人は幸せだ。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　野生のヒグマをとにかく見たい場合、決まったエサ場で決まったように動くヒグマを、やはり決まった場所から観察する方法が一般的で、確率も高い。大雪高原温泉やサーモンの遡上する時期の知床の小河川などでは、この観察法が可能だろう。知床なら船の上からでもヒグマを観ることができる。いわゆる一般的なベアウオッチングというのは、通常このタイプの「ヒグマ観光」を指す。ただ、その場合、ヒグマを見て、感激して、写真を撮ってというところまでは比較的簡単にいくのだが、そこから先に広がりが乏しい。ヒ

グマのいろいろを知るというところに直結していないのだ。私のすすめているのは、もう一歩踏み込んだ観察方法である。』

『　クルマという箱であくまで身の安全を確保しつつ、じつは北海道でも十分にベアウオッチングは可能だ。』

『　ヒグマの動向を把握しピンポイントで「待ち」をかけると、目撃する可能性は飛躍的に高まる。』

『　先述のアイヌネギの場合は、初心者でも一日山をさまよえば何カ所か小さな群生地を見つけることができるので、二年も一生懸命山を歩き回ればそれなりの勘は養われてくる。ヒグマの場合、実際に遇える回数が少ないため、なかなか勘が育たない。勘が頼りにできないとすると読みがものをいうが、「食いしん坊なヒグマ」に対しては、食痕を中心に各種痕跡からいろいろを推理し、そのヒグマの行動に自分を合わせていく感じで動けば、自ずとヒグマは近くなる。だから、ヒグマ眼を養うのが正攻法だ。多くの痕跡から見分けられ、その痕跡からいろいろを読み解くことができるようになってきたら、ヒグマはいよいよ近い。』

『　ベアウオッチングの効能は？　というと、一つは、もちろん嬉しいってこと。これは、狙っていた大きな魚を釣り上げた釣り人の心境同様、屁理屈抜きのいらない純粋な感情だ。恐らく、ヒグマを観察できるというのは、メーター級のイトウを釣り上げるのと同じくらい嬉しいことで、インパクトはもしかしたらそれ以上かも知れない。見事なイトウを釣っても、その顔を見ていられるのはリリースまでのせいぜい数十秒。その点も、恐らく同じ。見つけたヒグマを延々一時間ものんびり観察していられることはまずないが、イトウもヒグマもそれで十分我々に感激を与えてくれ得る存在だ。』

『　意図して野生のヒグマをきっちり見られる人は、恐らくヒグマをきっちり避けて行動することもできる。』

『　ベアウオッチングでは、ヒグマの山での暮らしを知ることはできても、至近距離でのヒグマ対ヒトの「やりとり」までは学ぶことはできない。山に実際に暮らすヒグマの存在を十分意識し、ヒグマを追い。ヒグマを徐々に知ってゆく中で、もし望みが湧けば次の段階、つまり、ヒグマとの「やりとり」に進めばいい。登山同様、難易度・危険度は高まるが対応能力も高まる。つまり、北海道の山や森や川をより自由に悠々と闊歩でき、もっと深く触れ、いろいろを感じることができるようになる。』

『　仮にヒグマに遇わないとしても、見えないヒグマとお互いに意識しながら、一定の「やりとり」を交わしてそれぞれの活動をする、というのが「ヒグマに遇わないための戦略」の趣旨であり、恐らく、その延長線上に共生とか共存とか呼ばれるヒグマとヒトとの関係がある。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その３９樹の上のヒグマ）

ヒグマは地上にだけいるとは限らず、若グマは木の上にいることがある。樹の上のヒグマについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　２００８年の秋、もう木の葉も散った季節に山を歩いていて、一頭のまるまる太ったヒグマを５０ｍほどの距離に発見した。そのヒグマは私から遠ざかって逃げつつ、薮に突っ込まず立ち止まって何やらこちらをしきりに見て躊躇していた。私は、そのヒグマの大きさ、そして行動パターンから例の「無知で無邪気で好奇心旺盛な若グマ」だと感じ、ベアスプレーのロックを外して若グマ対応の構えをとった。ところが、その直後、私の真横を一つの黒いかたまりが疾風の如く駆け抜けた。これまたよく太った仔グマ。そいつがかき分ける空気を風として感ずるほどの距離だった。つまり、初めに発見したヒグマは、若グマの好奇心で私のことを気にし逃げるのをためらっていたのではなく、逃げ遅れた仔グマを気遣ってどうするか困惑していた母グマだったのだ。恐らく、そこの植性からすると、仔グマは樹に高く登ってヤマブドウを食べていたに違いない。それを、私は見落とした。』

『　ヒグマは樹に登るのが得意かどうか。少なくとも言えることは、若グマ・仔グマは非常に得意である。ヒグマが樹に登る理由は、おおかた立ち枯れの樹に生えるキノコ類、あるいはツル科の植物（マタタビ・コクワ・ヤマブドウ）の果実を食べるためだが、小型個体の場合、見ているこちらがヒヤヒヤ心配するほど上へ上へ枝を伝わり、マタタビなどを起用に引き寄せて口に運ぶ。自然林で樹上で隣の樹に移動することさえある。』

『　ベアウオッチングを行う時、北海道ではササを中心とした分厚い薮が邪魔になって、なかなかヒグマを見つけられない。これは想像に難くないだろう。ところが、９月以降のヒグマの主食はツル科の木の実。つまり、ヒグマの側から薮を出てくれるのが、この時期なのだ。実際、偶然に限って言えば、秋には樹に登っている羆を見ることの方が、地面にいるヒグマを見るよりむしろ多い。』

『　この次期のベウオッチグのコツは、視線を上に向けることだ。この眼遣いは首が痛くなるが、普段あまりお目にかからないエゾフクロウなども偶然発見できたりするので結構楽しい。そしてもう一つ。ヒグマのエサ場を見つけたら、速やかにその斜面を降りて対岸の斜面を登り、そこから遠景の樹々を眺めてのんびりと待つ方法。どこかで不穏に揺れる

枝があったら、そこに樹に登っているヒグマはいる。狭い谷であれば、ヒグマの仕草まで肉眼で見て取れるだろう。』
『　では、大型のオスなどの場合、例えば前掌幅２０cm・４００kg前後の体格を持った個体が樹に登るかどうかだが、私は北大雪でもアラスカでも確認していない。確認できていないから「ない」ともいえないわけだが、総じて大型個体の木登りは非常に稀といえると思う。じつは、４００kgのヒグマが樹上のマタタビを食べるために樹に登る必要性そのものが乏しい。というのは、ツルというのはしなやかですごく丈夫にできているので、自分が登らずとも、ツルにツメをかけて引きずりおろしてしまえばいいのだ。マタタビのツルが巻き付いた直系１０cm程度の枝なら、大型のヒグマが体重を乗せてグイグイ引っ張ればいとも簡単に折れてしまう。秋以降の山を歩いていると、不自然に新しく折れたツル付きの枝を目にすることがあるが、折れた枝の大きさから、こいつは相当大型だな、などとそれを折ったヒグマを想像したりする。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４０食糧絡みの留意点）

私が京都大学山岳部の仲間と北海道の日高の山（ルートルオマップ川の沢歩き）に行ったときの経験。河原にテントを張り、寝るとき、調理した鍋や食器を外に置いたままにしてしまったので、夜中に、ヒグマがやってきて、テントの周りをウロついたことがあった。幸い、テント中に「匂い」が無かったらしく襲われずに済んだが、本当に危なかった。岩井基樹は、食糧絡みの留意点について、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　ベアカントリー内のキャンプでは、テント内で何かを食べるのはもちろん、テント内に食糧を持ち込むのも避ける。調理場とテントを１００m前後離すよう、アラスカやカナダなどでは勧告しているが、調理場とテントとの関係については、はっきりしたことは私個人はいえない。』

『　キャンプ場で肉を焼いたり魚を揚げたりするので、当然ヒグマはその匂いに誘引されて接近する。その内何頭かはキャンプ場内に侵入してみる訳だが、偶然でも何でも、そこでそのクマが人為的な食物にありつけるかどうかが、カギだ。』

『　誘引だけではヒグマというのはその場所に執着したり居ついたり、ましてや行動をエスカレートさせたりはしない。ところが、誘引し一度でも食べさせてしまうと、味をしめたヒグマの到来は必ずと言っていいほど常習化する。』

『　渓流釣りの遡行、あるいは山行で特に注意すべきケースは、「時間をあけて同じヒグマを二度見る」というもの。この場合、そのヒグマは食糧が絡んで少なくとも常習化を起こし意図的に釣り人・登山者についてきている可能性が高いので、用心しながら即撤退が懸命な判断だ。』

『　ベアカントリー内もしくはその周辺では、もしクルマや頑強な倉庫があれば、そのなかにすべての食糧・生ゴミ・使った食器などを入れて置けばよいが、それ以外の場合、次のような方法で食糧・飲料等をしっかり管理する。』

『　A・ハングアップ：食糧を樹などに吊るして、ヒグマが届かないようにする方法。ただ、食いしん坊なヒグマに対してこちらの食糧を単純に木に吊るしただけでは効果が薄いようで、「７mほど離れた二本の木にロープを渡し、その中央に食糧を吊るす」というのがアラスカ辺りの一般的な推奨である。』

『　B・ベアルーフ・コンテナ：ベアルーフ・コンテナとは、強度のある軟質プラスチックでできた円筒形の容器で、円柱の直径、突起など、とにかくヒグマの歯が掛からないように設計されている。歯が掛かりさえしなければヒグマの驚愕の顎の力も発揮させられず空回りする訳だ。携帯用のものは通常アウトドアショップで売られている。』

『　C・防水容器に食糧を詰めて川に沈めておく。山塊の尾根周りでは使えない方法だが、川周り・沢周りを主な活動の場とする私の場合などは、非常に有効な手段である。食糧を入れる容器はジップブロックでもいいし、タッパー、広口容器でも構わない。なるべく浮きづらいよう空洞をなくし石や砂利などの重みで川に沈める。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４１ベアカントリーでの焚火）

キャンプの楽しみの一つに「焚火」がある。火に当たりながら酒をチビリチビリ飲み、仲間と話をするのも実に楽しいし、一人でじっと火を見ていても何ともいえない気分になる。その「焚火」のことだが、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように述べている。すなわち、

『　火や煙はヒグマを遠ざけるか？　結論から言うと、これはヒグマが火や煙と何をどう関連づけて学習しているかによるので、一概にはいえない。ヒグマが火や煙とヒトを関連づけて学習しているのは北海道も北米も同じだろうが、北米では銃とヒトもヒグマは危な

いものとして関連づけて学習している可能性が高い。先述のように、北米ではクマに人為物を食べさせることがいけないことだと普及し、実際に住民も釣り人もキャンパーも誰も彼もがそのように実践しているので、ヒグマが人為物の味とヒトを関連づけるチャンスが少ない。この状況では当然、火や煙はヒグマを遠ざける媒体にはなる。逆に、北海道ではゴミや農作物などの管理がルーズで、それらの人為物をヒグマが食べる機会が多く、さらにヒグマと遇って慌てて逃げるようなヒトも多いので、火や煙は単にヒグマを誘引する要素となり得るかも知れない。つまり、火があって近づかないヒグマは、火が無くても近づかない。火が無くて近づくヒグマは、火があってもやはり近づく。このように言えるだろう。焚火の存在は、ヒグマに対して、より判りやすくヒトの存在を示す手立てにはなるが、むしろヒトにとっての心理的影響の方が強いように思う。』

『　ユーコンの河旅でもアラスカの森林でも、だいたい私の場合は降りてくる夕闇と競うようにテン場を定めるが、その手順の真っ先に行うのが焚火を起こす場所を定めること。多少の寝心地などどうでもよい。まず焚火の場所なので。その場所が基準になってテント、荷物置き場、食糧置き場、トイレ、そして自分の居場所などすべての野営空間が出来上がってゆく。そういう意味で、焚火はまず野営空間の大黒柱的存在だ。起こした焚火を愛おしむように冷えた身体を温め、釣った魚・獲った獣を調理するので暖炉でもあり調理コンロでもある。そして、いよいよ闇がその森に降りてくると、焚火は月光とともにまさに貴重な灯りとして振る舞うようになるわけだ。』

『　また、オオカミの群れが近づいたり、もっと得体の知れない何かに気持ちが鷲掴みにされたときなど、焚火は唯一の頼れる相棒のような顔でそこにユラユラとあるものだ。こうして夜は更けてゆき、焚火が消えるとともに置き火を惜しむようにシュラフに潜り込むのがウィルダネスでの夜の過ごし方だ。この暮らしを幾晩も延々と繰り返していると、いつしか焚火への依存度が増しつつ次第に神秘性を抱くようになってゆく。それで焚火は神棚のようにも思えてくる。通常、神棚の前で片肘をついて寝ころぶこともないだろうが、ウィルダネスの神棚はこれでいい。大黒柱から始まり、暖炉、調理コンロ、灯り、相棒、そして神棚。これだけ多くの貴重な役目を果たしてくれるウィルダネスの焚火だ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４２ゴミ拾いの勧め）

ゴミはヒグマを引きつけるのでベアカントリーでは大変危険な存在だ。そこで、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように「ゴミ拾い」を勧めている。すなわち、

『　知床のあるヒグマの研究者が、ヒグマに対するエサやりを殺人幇助などと公然と表現し、その表現の強さからバッシングを受けたりするが、実際、この程度の言葉にバッシングが起きる北海道の方が私は恥ずかしい。』

『　「エサやり」も「ゴミのポイ捨て」も似たり寄ったりだ。殺人幇助まではいかずとも、仮にそのゴミに餌付いたヒグマが、次にやって来た他の誰かを攻撃した場合、実際的に過失傷害・過失致死くらいの罪はあるだろう。』

『　カナダなどをさすらって釣り歩いていると、その流れと魚の鮮烈もさることながら、ゴミがひとかけらも落ちていないことに驚きを持つ。釣りでも山菜採りでもキャンプでも、残念ながら北海道では、無知か愚かか無責任かそれ全部か知らないが、そういう人間がまだまだ沢山いる。』

『　そこで。例えば、釣りの現場では、河原はもちろん入渓する際の駐車スペース、あるいはそこから川へ続くフィッシャーマンズ・トレイルなどにゴミが落ちていたら、できるだけ拾って持ち去る癖をつけたい。』

『　私のホーム湧別川では、丸瀬布の釣り人が中心になってこの方法を自発的に行っている。彼らの行為は特にクマを意識してではなく、釣り場の環境を思う素朴で当たり前の動機からだが、湧別川では白滝・丸瀬布の本支川はもちろん、遠軽直下の湧別本流であってもヒグマが降りることがあるので、ヒグマ対策としても有効だ。』

『　ちなみに、アメリカ合衆国内のヒグマによる人身事故のうち三分の二は食物によって関連づけされた個体によるものとされ、１９６７～８４年にイエロストーン、グレイシャーの両国立公園内で発生したヒグマによる死亡事故９件のうち７件はゴミを食べて慣れたヒグマによるものだったという。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４３ヒトの匂い）

ベアカントリーでは私たち身体の匂いもヒグマを引きつけるらしい。そこで、岩井基樹は、ベアカントリーに入るヒトの匂いについて、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　ヒグマは、はじめて経験する違和感に対して必ず反応し、多くの場合、その場所に接近を試みる。違和感が匂いであればその傾向は強いであろう。また、そのまま万が一、至

近距離で遭遇してしまうと、今度はその匂いがヒグマを刺激し、普通とは異なった行動をとらせる場合がある。厳密に言えば、注意すべきは街に漂っているありとあらゆる匂いである。現実的にはなかなか難しいだろうから最大の努力という言い方にならざるを得ないが、私の場合は、風呂に入った次の日は原則的に若グマへのストーカー行為やガチンコ教育（追い払い）は行わない。必然的にこれを行う時期になると、極端に風呂に入る回数が減り、石鹸やシャンプーもあまり使わなくなる。そして、若グマの山を歩く時は洗濯したての衣類を身に着けない。北海道各地の山でヒグマ研究者に遭遇した場合、どこか臭いそうな小汚い格好でベアカントリーを歩き回っていたら、「こいつはやるな」と思ってもらいたい。』

『　森を一日歩くと、恐らく２ℓ以上の水分を補給する必要がある。この時、オレンジジュースやコーヒーではなく水か、せめてお茶をお勧めする。』

『　延々尾根筋を行くのでなければ、湧き水・沢水をそのまま喉を鳴らして飲むのでもいい。ただし、ご承知の通り北海道にはエキノコックスなるキツネを宿主とする寄生虫がある。これが体内に入ることが考えうるので、沢水湧き水派は少なくとも二年ほどに一度エキノコックスの検診を受けることを強く勧める。エキノコックスが人体に入って数年ほったらかしにすると、悪ければ死亡することもあるので要注意だ。２０００年以降、エキノコックスによる死亡者は年間に２〜人程度。エキノコックスもデータ的にはやはりヒグマより危険性が高い。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４４ベアカントリーにおけるベテランの食事）

ベアカントリーにおけるベテランの食事について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　意外と盲点となるのが食事をとるタイミングだ。ベアカントリーでは、時間ではなく行動予定で食事の時間・場所を決めるように心がけるべきだ。ヒグマと遭遇しそうな場所を訪れる前ではなく、ちょっと我慢してでも、そこから帰ってから（あるいは越えてから）食べるという工夫が要る。ここにも想像力が必要だ。登山の場合なら、特にヒグマの痕跡の多い見通しの悪いブッシュ、初夏なら沢沿いのフキ群生地、高山なら雪渓の解けぎわ、あるいはアリの豊富なガレ場付近など、ヒグマとの遭遇が想定できる場所が移動ルート上にある場合、多少の腹ぺこを押してでも水で凌いでそこを通り過ぎ、その後昼食にするという工夫があっていいと思う。』

『　それと、もう一つ、食事の質にも気を遣うのが望ましい。先年、あるグループで大雪の高原温泉の沢巡りコースを歩く機会があった。弁当持参だったので、私はいつもの調子でテルモスのお茶とジップロックに入れた梅干しおにぎりをザックに放り込んで持って行った。ところが、いざ昼食になってみると、同行者は皆ウィンナーソーセージやら卵焼きやらハムやらプチトマトやら豪勢なお弁当をきらびやかな感じで広げた。ここはヒグマの頻出地なのだ。梅干し入りのおにぎりを食べてベアカントリーを歩くのと、ウィンナーソーセージを胃に入れて歩くのと、どちらがその後しばらく吐く息が周辺のヒグマを刺激もしくは誘引するか。』

『　私の山の師匠のエキスパートに、山に入ると歩きながらその辺に生えている草や葉っぱを食べる人がいる。こっそり追尾して同じものを食べ歩いたことがあるが、どれも決して旨くはない。山の訓練の一つでもあるようだが、ベアカントリーではこのスタイルが理想といえば理想だ。私もベリーの群生地では弁当要らずの一日を過ごすが、北大雪の登山道などでこれをやると、自分の好きな実を探したりするので、結構楽しい。』

『　北海道の厳冬期以外の山であれば、塩さえ持っていれば食糧など持たなくても、適当に工夫してその辺にあるものを食べていれば一週間やそこら何の不調もきたさず活動することができる。』

『　吐く息のヒグマの刺激・誘引に関しては以上だが、その山にできるだけ馴染むというのは結構大事なことだと感じる。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４５ブラッドマジック）

血の匂いというのはベアカントリーでは特別の意味を持っている。そのことを岩井基樹は「ブラッドマジック」と呼んでいるが、日本語でいえば「血の魔術性」とでも言えばいいだろうか。魔術とは、現代の奇術師が帽子の中からつぎつぎと鳩を取り出してみせるように、無から有を発生させ、生命を持たない金属のような物質につぎつぎと子供を生ませ、増殖させていく技術だが、そのように、普段は何事も無いベアカントリーという野生の世界では、血の色である赤が現われるとヒグマは、子供を生ませ増殖させていく本能を呼び起こすためなのか、特に興奮するらしい。ヒグマは、興奮させてはならない。したがって、女性がベアカントリーに入る時期としては、生理期を避けた方が良さそうだ。そういったベアカントリーに置ける「ブラッドマジック」について、 岩井基樹は、著書「 熊

のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　アラスカのキーナイ川の支流にロシアン・リヴァーという清楚な感じのする小河川がある。小河川は小河川だが、そこにはキーナイ本流から遡上するネイティブレインボウやら真っ赤に河を染めるレッドサーモンが溢れている。ロシアンとキーナイの合流点近くの高台には大きな公営キャンプ場があって、釣り人やキャンパーやらですごく賑わう場所で、キャンプ場からロシアン・リヴァーにかけて、しっかりした木道がつけられている。昔の話になあるが、このロシアン・リヴァー沿いの木道で、ジョギングをしていた一人の女性がヒグマの攻撃に遭い死亡した。この場合、土地柄から、もし餌付けされたような異常グマが徘徊していれば即座に対応するので、その可能性は薄い。その他に推理が二つある。一つは、ジョギング・スピードだ。比較的速いスピードで彼女に近づかれたヒグマが、咄嗟に攻撃を仕掛けたのがきっかけだというもの。もう一つは、女性の生理の状態だ。秋田の阿仁では狩猟の山は女人禁制である。アラスカでも、無骨なハンターは「女を連れて行ってはダメだ」とはばからず言う。攻撃のきっかけは前者かも知れないが、殺してしうまでやめなかった理由は後者かも知れない。山や川を女人禁制とするのはこの現代ではナンセンスも甚だしいが、女性は女性なりの自覚を持つことも、場合によっては必要だろう。』

『　春先などに、夕刻に手負いにしたシカを一晩おいて追跡回収しようとすると、しばらく行ったところでヒグマの足跡が重なってつくことがある。そして、その跡をキツネが追い、最後に私がついてゆく形になったりするが、これはエゾシカが負った傷のせいだ。血の匂いというのは野生界では特別のサインとして意味を持つ。』

『もう一つ関連して触れておかなければならないことがあるとすれば、色についてだ。あらゆる肉食の動物に共通の色彩の特異点というのがあり得る。それが赤だ。これは単に赤色が木々の緑の補食で目立つ色だからではない。この色が血、肉の色と関連づけられているからだ。赤という色は動物を刺激し興奮させる色のように感じる。なので例えば、ベアカントリーに入る際には赤い衣服を避けるという判断を持ってもいい。赤い色の服を着たヒトはヒグマに攻撃されやすいという科学的な立証も統計データないが、私自身はそうしている。』

『　ブラッドマジックとは逆に、匂いの関連付けでは単純に面白い可能性がある。現代の女性のダイエット薬として人気のあるカプサイシンという物質。これは、唐辛子から抽出した成分でダイエット需要とともに安価になっている。このカプサイシンなる物質が、実はベアスプレーの主成分でもある。カプサイシンの匂いとさまざまなヒグマの忌避感情を結びつけることで、これがヒグマ撃退物質であるとともに、作られた忌避剤として機能するようになる。現在、調査エリア内でテスト段階であるが、北海道全域でこの関連付けが実現すれば、農地・人里・キャンパー・釣り人など、多くの場面で効果的に用いることができるようになるかも知れない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４６シカの死骸は危険）

シカの死骸を見つけたら速やかに退避することにこしたことはないらしい。シカの死骸の危険性について、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『 数学用語に特異点というのがあるが、私は単に他とは異なった特殊な地点・異質な場所を特異点と呼んでいる。ヒグマの場合、特に重要なのが食の特異点だが、ヒグマの大好物がある場所、あるいは主食がまとまってある場所はヒグマの食の特異点となり得る。特に強い特異点では、普段のヒグマと異なる行動パターンが見られる。』

『 サーモンが欠落した北海道では、ヒグマは動物性タンパク質に餓えているように見受けられ、シカ死骸というのは突出した食の特異点だ。初夏ならフキの群生地。夏であれば、アリの巣が集まるガレ場、そしてデントコーン農地。そして秋なら、ツルの多く生い茂る山の斜面と木イチゴの群生地がそれに次ぐ特異点だろう。もちろん、サーモンが遡上している河川なら、その流域全体のサーモンが捕獲しやすい場所が特異点となる。』

『 シカに付いたヒグマは強い執着を見せ、その周辺では攻撃性が高まっていると考えられるが、逆に、サーモンが累々と遡上する河川の小滝などでは、エサとなるサーモンが無尽蔵にあるため、攻撃性はむしろ小さくなり、結果、ある時期に局所的なヒグマの高密度エリアも出来上がる。』

『 シカの死骸を特筆するのは、その特異点の強さもさることながら、シカ死骸が概して人知れず、アトランダムに、まるで隠したようにこっそり置かれているからだ。春先の積雪期の死骸ならともかく、盛期の場合、道ばたに即死したシカ以外ほとんど視認することができない。』

『 シカ駆除に絡む死骸は、だいたい農地周りの薮に転がり、観光シーズンの交通事故によって生ずる死骸は、比較的交通量の多い国道・道道から１００m以内のどこかに転がる可能性が高いだろう。どちらも、河川周り・人里周りなのだ。』

『 源流部へ釣りに入る人は、ヒグマを想定し、ある程度の対策を講じて釣りをするだろう。昨今ではベアスプレーをしっかり腰に下げている人もちょくちょく見かける。ところが、中〜下流域で活動する人は、その想定と対策をほとんど持っていない。人里近くに忽

然と置かれたようなシカの死骸、これが問題だ。現在、北海道でもっとも人とヒグマの事故が起きやすいのは、山奥ではなく人里農地から１km以内のエリアだろう。』

『　「人の存在のアピール」というのがベアカントリーでは重要なのだが、山奥で大声を出して思う存分アピールできる人も、人里周りではついつい気恥ずかしさのために、それをやることをためらってしまう。つまり、もっともヒグマ密度の高いエリアで肝心なヒトのアピールを仕損なってしまいがちなのだ。私の自宅から人里方面の林道を歩く昆虫採集家や釣り人でも、ときどき仰々しくクマよけの鈴をチリンチリンいわせて歩いているが、これがむしろ正解なのだ。』

『　人里近くではシカの死骸が攻撃性の強いヒグマを引き寄せている。 シカの死骸は人里周りの地雷だ！』

・・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４７見えないシカの死骸を感知して）

先述のように、 岩井基樹は、「人里近くではシカの死骸が攻撃性の強いヒグマを引き寄せている。 シカの死骸は人里周りの地雷だ！」と言っている。重要なことは、見えないシカの死骸を感知して、的確な対応をとらないといけないということらしい。それらのことについて、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　非積雪期の見えないシカの死骸を感知する方法には概ね二つある。一つは、カラス、オジロワシ、カケスなどの鳥類の行動から読むという方法。二つ目は、自分の嗅覚を頼りに匂いと風で予測するという方法である。』

『　鳥類というのはもちろん視覚によってシカの死骸を発見するもので、上空から見える死骸は、まず彼らが見つけ群がるだあろう。ところが、山塊では、あの優秀なカラスさえ発見できない死骸が結構ある。これに対してヒグマやキツネなど嗅覚を頼る動物が有利になるが、我々ヒトも、かなり鈍感ながら嗅覚で死骸を見つけるしかない。』

『　ではシカの死骸臭とは？　これはなかなか巧く説明できるものではない。だが、自宅にいて近似的に学ぶ方法がある。スーパーへ行って牛肉を一塊買って来て、自室のデスクの上にでも放置してみよう。あまり乾燥してもいけないので程よく密閉し、あとは常温で放置して観察するだけだ。夏期なら三日も経てば異臭を発し始め、その後匂いにへんかをもたらしながら、しまいには独特の臭いを強烈に発するようになるだろう。レバーを一緒

に腐らせればさらに効果的だ。ドロドロと溶けかけていれば死骸臭学習には最高の状態だ。期間は一週間で十分だろう。この一週間の臭いを頭に叩き込む。それが嗅覚への実践的学習方法だ。』

『　慣れてくるとそうでもないだろが、はじめは相当イヤな臭いとして感じるだろう。私などは、悲しいかな、ここ数年これがちょっとした馴染みの臭いになってしまっているが、クルマや歩きでその臭いを感知した場合、とにかく風向きを確認し、匂いの元がある場所のおよその方向を把握して行動を判断する。この意味でも、林道などをクルマで走る場合は、窓を開け、できるだけいろいろを感じながら比較的ゆるゆる進むのがいい。』

『　ヒグマがエゾシカを食べる場合、さすがに食べきれず、土などをかけて隠し温存する習性がある。キツネやイヌも食糧の温存に土をかけて見えなくするが、それらに比べればヒグマの温存はかなりいい加減だ。知床の研究者はこの状態を土饅頭と表現したが、なるほどと思ってしまうので私のそれに倣う。土をかければ土饅頭だが、雪、草などそのへんにあるものを具に使って雪饅頭、草饅頭をヒグマはつくる。』

『　ヒグマの作る各種饅頭だが、通常、ヒグマは作ったまんじゅう近隣に潜むのが普通だ。なので、シカ死骸からの退避の仕方は「来た道をそのまま」という部分がミソ。下手に迂回して通り過ぎようとすると、そのルート近くにヒグマが潜んでいる可能性がある。』

『　もしシカ死骸に近づいてしまった場合は、それが「饅頭化しているか」の他に、「引きずられた跡があるか」によって、ヒグマが関与しているかどうかを判断できる。ヒグマはシカの死骸を移動して好む場所で食べる習性もある。シカの死骸を引きずる動物は、北海道ではヒトかヒグマしかいない。例えば、人里周りで何かが引きずられた跡があって、そこに血が付いていた場合、その進む方向が道路・農地方向であればハンターがシカを回収した跡。山側・薮方向に向かっていれば、それはヒグマが運んだ跡であると見ていい。また、夕方に見かけたシカの死骸が翌朝忽然と姿を消している場合などは、まずヒグマの仕業を判断していいだろう。その時は長居は無用。速やか、かつ、用心深くその場を離れること。』

『　仮に、その時点でヒグマがシカの死骸に関わっていなくても、シカの死骸がある屠蘇の臭いによって接近して来ている可能性が十分あるので、とにかくシカの死骸を発見した時は、速やかに、かつ、用心深くその場を離れること。もしその場所が、観光客や釣り人の活動する場所であれば、鳥獣行政に報告し対応してもらうのがベストだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４８ヒグマの注意看板）

家屋や農地のある人里とそれ以外の山（いわゆるベアカントリー）では注意喚起の看板がどうも曖昧になっているらしい。人里では「ヒグマ出没注意！」の看板であっても仕方がないが、人里から離れた山では「ここはヒグマの生息地！接近注意！！」という看板にすべきで、両者は厳密に区別すべきだと岩井基樹は考えているらしい。そういった考えから、岩井基樹は、ヒグマの注意看板について、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　「ヒグマ出没注意！」・・・北海道ではこのような看板を目にする機会は多いことと思うが、私は前々からちょっとニュアンスが違うなあ、とただ漠然と思ってきた。なんとなく滑稽なのだ。「だって、ここ山じゃん。出没してるのこっちだし・・・」てな具合に。』

『　そこで、人里外の看板をこんなふうにしてみてはどうだろう。「ヒグマ生息・注意」。本心を言えば、「ヒグマ生息・注意＆ご期待！！」なのだが、そこまでは言わない。が、局所的な特別地区になるだろうが、いつかこんな看板を山間部に掲げてみたいと思ってはいる。』

『　私の原則に「人里とはヒグマがいてはいけない場所」というのがある。したがって、人里内にヒグマがうろついていれば通常「即、追い払い」という手段をとる。が、実際は、単に横断するだけのヒグマもあり、そういうクマは追い払いを待たず勝手にどこかへ去ってしまう。もし、人里の食べ物に執着しているヒグマがいる場合、持てる限りの執拗な追い払いが利かなかったり、万が一、例のエスカレートを起こしかけているようなら、射殺要請という手順だ。この場所では、仮にヒグマが確認できれば、注意喚起看板は「出没注意！」である。特定の時期に人里内の特定の場所に何度も出没を繰り返しているヒグマの場合は、ゴミ捨て場や肥料用の魚の内蔵や農作物など人為的な食物に引き寄せられて山から人里へ降りている場合がほとんどなので、正しく看板を立てるとすれば、「ヒグマ誘引中・注意！」あるいは「ヒグマ餌付け中・注意！」な訳だが、これに関しては、今のところ仕方がないので、「出没注意」を用いてもいいと思う。』

『　「人里はヒグマがいてはいけない場所」という原則の他に、もう一つの原則として「ヒグマがいてもいい場所では原則ヒグマの存在を容認する」というのがある。つまり、人里外はヒグマがいてもいい場所で、そこでのヒグマ捕殺は原則しない、というもの。この場所での看板は「生息注意！」である。』

『　行政がどうして出没を使い生息を使いたがらないかというと、まずは例の情報・知識が欠落しているから。ヒグマのいろいろを把握していないどころか、把握しようともしていない。何頭くらいのどんなヒグマが人里近くのどこでどのような生活をしているのかほとんど知らず、単に目撃された部分だけをとって、出没したということになる訳だ。そし

てもう一つの原因は、行政が人里の空間イメージを明確に持っていないということ。つまり、行政としてしっかり管理すべきヒトの空間にヒグマが出没しているのか、ヒトがヒグマの山に出没しているのかが曖昧になっていて、目撃情報があるとついついその場凌ぎで「ヒグマ出没注意！」の看板を立てて任務完了みたいな顔をしてしまう。（岩井國臣のコメント：岩井基樹が言うように人里というのはまずヒトの管理が重要で、農地の管理にしろ、牛舎の管理にしろ、ゴミの問題にしろ、とにかくヒグマを人里に寄せつけないようにヒト側の管理がしっかり行われるようになれば、北海道はヒグマとの共生というか自然との共生という点で、２１世紀を先導する素晴らしい地域になる。そのために、岩井基樹をはじめ「羆塾ひぐまじゅく」の活動に大いなる期待を持ちたいと思う。）』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その４９ヒグマ「バッタリ遭遇」）

２１世紀は「自然」が一つの大事なキーワードだ。自然に驚き、自然に教えられ、自然を楽しむことが私たちがこれから目指すべき生き方であると思う。北海道の人たちは、あるいはまた内地の人でも機会があれば、北海道の山を歩いて欲しい。その際に大事なことは、ヒグマとの「バッタリ遭遇」を回避することだ。ヒグマとの「バッタリ遭遇」を回避するためにはどうすれば良いか？　そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で次のように言っている。すなわち、

『　悪いシチュエーションにあたるのは食物絡みの場合と、もう一つは至近距離遭遇、いわゆる「バッタリ遭遇」というやつだ。距離に決まりはないが、概ね３０～４０m以内だろうか。正確に言うと、この距離でお互いをお互いを認知し、向き合ってしまうような状況をいう。』

『　私がはじめてヒグマに遇ったのは、学生の時分、猿払川の上流にある隠れ沼だった。ひどい強風の中、立った一人で黙々と釣りをしていて、ヒグマは私にまったく気づかず接近してしまったようだ。私がそのクマを発見した時の距離がちょうど３０mほど。姿全体は見えず、逞しい背中のコブが動いていたのを今でも鮮明に覚えている。その出来事は追っていた巨大イトウを釣り上げる以上に衝撃的だったと思う。このとき、私がとったのが「そ知らぬ顔作戦」とでも言えるのか、つまり、知らぬ存ぜぬを通し、穏やかに竿を振りながら、わざとクマに聞こえるように鼻歌を歌ってそのまま林道まで帰った。ヒグマは、私に気がつき動きを止めたが、私が去ってから思ったに違いない。「危なかった、危なくヒトに気づかれるところだった」と。』

『　通常、ヒグマが感知できないのは、ヒグマ側が、大半「前もって遠ざかる」、たびたび「そそくさと逃げ去る」、意外と多い「ササ薮に潜む」という戦略を用いるからだ。』

『　ササ薮に潜むという戦略は、北海道では目立ってヒグマが多用する戦略。「潜むヒグマ」が非常に多く存在することを、ベアドッグを連れるようになって私自身あらためて自覚した次第だ。その時の最短接近距離は１０m以内であることも多く、こちらが気づかずに通り過ぎてしまう限り、悶着に発展することはほとんどないだろう。』

『　端的に言えば、ヒグマとのバッタリ遭遇回避術は、「前もって遠ざかる」という戦略をヒグマ側がとるための、ヒト側のいろいろな工夫といえる。したがって、もしヒグマが前もって遠ざかれば、まずまず成功ということだ。仮に１０mの距離にヒグマが息を殺して隠れていても、刺激をしたり切迫させたりせずそ知らぬ顔で通り過ぎることができれば成功である。』

『　バッタリ遭遇でヒグマがヒトを攻撃する事例の半分は、ヒト側がヒグマを驚かした場合、あるいは追いつめた場合。つまり、「窮熊人を噛む」の状態といえる。残りの半分は人がパニックに陥り支離滅裂な行動に走った場合だろう。そこでヒト側としては、とにかく前もって遠ざかるチャンスをヒグマの側に与えてやることを考える。ヒグマが攻撃型のヒグマならこれは通用しないが、とにかくヒグマの側に委ねてやる。実際のアッピールの方法としては、匂いは風に依存し不安定なので、音によるアッピールが常套手段になる。普及してきている方法としては、熊よけの鈴・ベルだろう。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５０ヒグマを驚かすな！）

先述したように、ヒグマに「前もって遠ざかる」戦略をとらせるためには鈴・ベルが一般的らしいが、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のような面白いことを言っている。すなわち、

『　私自身は、最近では鈴もベルも身につけない。その代わり、ルートの要所要所で「ほーい１ほーい！！」と素っ頓狂に声を出し、それに加え手を叩いて（拍手）「バン！バン！」と音を打ち鳴らす。いわゆる登山者と釣り人とは神経の使いどころがかなり違っていて、あまり怪しそうな場所では、手前でちょっと立ち止まり、周辺のいろいろを観察し、少し念入りにこれを行い、しばらく耳を澄ませて反応がないのを確かめてからゆっくり通り過ぎることもある。とにかく人の接近・動向を事前事前にヒグマの側に知らせてやり、近隣のヒグマに猶予を与え、好きな戦略を持ち出させてやることだ。』

『　音によるアッピールで、爆竹・轟音玉・ロケット花火などの破裂音をならす場合は、アッピールではなく、近くに潜んだヒグマを驚かせるかの生があるため、使用には十分注意が必要だ。原則的に破裂ものは多くのヒグマにアッピールする方法で、近くにいるかも知れない場合には使えない。現実的には、渓流の遡行や登山など徒歩で移動しながらの爆竹は、よほど開けた場所でなければ使いにくい。爆竹は、クルマというシェルターがある入渓・登山開始の時点で使うことが多くなるだろう。林道沿いの沢なら、入渓地点で爆竹を鳴らし、いったん上流までクルマを走らせてから入渓ポイントに戻り、さらに一服してから沢に入るくらいでちょうどいいかも知れない。私は、位置が確実に判っているヒグマの追い払い以外では、よほど条件が重ならないと爆竹などの破裂ものは使わない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５１クマよけの鈴の盲点）

先述のように、岩井基樹は『　私自身は、最近では鈴もベルも身につけない。その代わり、ルートの要所要所で「ほーい１ほーい！！」と素っ頓狂に声を出し、それに加え手を叩いて（拍手）「バン！バン！」と音を打ち鳴らす。いわゆる登山者と釣り人とは神経の使いどころがかなり違っていて、あまり怪しそうな場所では、手前でちょっと立ち止まり、周辺のいろいろを観察し、少し念入りにこれを行い、しばらく耳を澄ませて反応がないのを確かめてからゆっくり通り過ぎることもある。」と言ってるが、しばらく耳を澄ませて何か反応があれば、彼は、多分、そっとヒグマの観察に入るのだろう。ベアカントリーでヒグマに遭遇しなければそれで良いというようなものではないと思う。観察できるチャンスがあれば、そっと観察した方が良い。それがベアカントリーでの楽しみでもある。そこで、岩井基樹は、クマよけの鈴の盲点について、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように言っている。すなわち、

『　クマよけの鈴の便利なところは、ただ歩くだけで自動的にいつもチリンチリンと音が鳴るところだ。ところが、その利点が欠点ともなる。』

『　自動的に鳴るクマよけの鈴のせいでヒトは知らず知らず、周囲の観察・判断、そしてヒグマの行動を読む癖が無くなってしまうのだ。登山者でよく登山道で視線を落とし、まるで何かに取り憑かれたように歩いている人を見かけるが、このような歩き方は、ベアカントリーの歩き方としてはまったく好ましくない。五感を使って周辺のいろいろを感じ取りながら歩くのが正解だ。』

『　クマよけの鈴は確かに効果的な道具だが、観察・読み・判断というベアカントリーのスキルを得るためにも、また、ベアカントリーを楽しむためにも、声と拍手を是非勧めたい。鈴をザックに付けてベアカントリーを歩くことには、私もまったく否定する訳ではない。その時は、五感を働かせ、自ら判断・予測する習慣を忘れずに。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５２緊迫のスイッチ）

ヒグマには緊迫のスイッチが入る場合というのがあるらしい。ヒグマが驚いた時にそうなるのだが、その場合、逃げるヒグマと攻撃してくるヒグマがいるようで、その対応が難しいらしい。したがって、ベアカントリーでは注意深くヒグマの存在を察知しながら安全距離をとり、緊迫スイッチが入らないようにしなければならないが、若グマの追い払いの場合は、逆に、緊迫スイッチが入った方が良いようで、 岩井基樹は、緊迫スイッチについて、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　動物には概して自己空間というのがある。この範囲は特に知的な動物に関して個体差もあり一律に言えるものではないが、ある距離を境に何らかの行動を起こさざるを得なくなる、そういう距離が存在する訳だ。これはイヌにもヒトにもある。』

『　ヒグマの場合、その距離はヒトより長く、その行動は、ぱっと逃げる場合もあれば、逆に攻撃してくる場合もある。どちらの行動になるかはケース・バイ・ケースだが、この距離でそれぞれのヒグマの緊迫スイッチがパチンとはいると思えばいいだろう。』

『　北海道のヒグマの場合、通常は逃亡型のスイッチが入るが、どういう要素で攻撃型へヒグマの心理が転がるかは一概に言えず、比較的近距離にヒグマが存在する時は、いかなる場合でもこの可能性を想定して行動しなくてはならない。』

『　非常に稀な例だが、興味深い事例が北大雪の麓にある。遠軽と丸瀬布の中間地点に瀬戸瀬という集落がある。ある朝、嫁さんが農作業に取りかかろうと表に出てみると、自分の畑で作物を食い荒らす犬が眼に入った。それを見た嫁さんは、鍬を持ったまま間髪入れずその犬めがけて走り出し、猛然と追い払いにかかったという。ところが、その動物は犬ではなくてヒグマだったのだ。嫁さんは、そのままヒグマのところまで駆け寄り、いよいよ高く力を込めて鍬を振りかざし襲いかかろうとした。それを見ていた若グマは、はじめは呆然の体で眺めていたが、躊躇なく猛然と近づく嫁さんの形相に恐れをなしたか、それ

とも嫁さんの予想外の暴挙におののいたか、激突寸前で一目散に逃げ去ったという。その後、その若グマは二度とその農地へは降りてこなかったということだ。偶然、この危険で愉快で示唆に富んだ出来事は起きた。証言によると、比較的小さなヒグマだったということだが、その行動からしても親離れしてからあまり年月の経たない若いヒグマだったことは、恐らく間違いない。』

『　仮に、この時の動物がこのヒグマと同じ大きさ、ボリューム感の野犬だったら、私ならその犬の方がはるかに恐い。」

『　怒濤の如く一気に追い払う。これが、若グマの追い払いのコツだが、嫁さんは偶然にもそれを忠実に実践したことになる。』

『　もちろん、ヒグマの撃退法あるいはヒグマの忌避教育として、かの嫁さんの方法をヒトに勧める気には到底なれないが、このケースでは、結果的に彼女のとった撃退法は非常に理にかなった方法だったということは確かだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５３私のベアドッグ魁）

岩井基樹は現在三匹のベアドッグを飼っているが、この「熊のことは熊に訊け」を書いた頃は、最初の狼犬を飼い始めたばかりだった。その魁（かい）の躾（しつけ）について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　ベアドッグのタマゴ・魁は現在生後１０ヶ月だが、私の調査に連れ回し、ヒグマとも何度か対面させている。』

『　魁は生後二ヶ月からベアドッグとして特別のしつけ・訓練を模索しながら行ってきたので若干普通の犬とは異なるだろうが、魁に急に接近されたとき、ヒグマはいったん薮中を慌てて数mほど逃げつつ、そこで止まって向き直り犬に退治する。その状態がしばらく続いたところで私は魁の呼び戻しに成功しているので、対峙した二頭の動物をそのまま放置するとどうなるかは、まだ判っていない。ヒグマは、魁が薮から出ても、それを追って飛び出すことはなく、対峙した場所からは動かない。私はヒグマの動きに注意しながら、薮中のヒグマに聞こえる大きな声で魁を誘導しながらわかりやすくそこから立ち去るのが、少なくとも今までのパターンだ。ただし、少なくとも今までという部分を強調しておきたい。』

『　通常のペットとして飼われている犬を連れてベアカントリーを歩くのは避けるべきである。敏感な犬は、道路脇に隠れたヒグマを感知し、見て見ぬ振りはできない。鈍感なヒトだけなら鼻歌交じりにさりげなくすれ違えるものが、犬によって潜んだヒグマを切迫あるいは刺激し飛び出させることがある。ヒグマ対策用に特別な訓練を施された犬以外は、だいたいトラブルの種にしかならない。』

『　私は、ヒグマ対策のベアドッグ育成のために、リスクを覚悟し、現場での実戦的訓練を強いられているが、自ら考えうる装備を持ち、常にヒグマの飛び出しに神経を遣って山を歩いている。もちろん、ある程度のトラブルを想定した上で。5年後には、模範となる先輩犬につかせ、もっと安全な仔犬の訓練ができるようになっていたい。』

『　私のベアドッグによるヒグマの追い払いイメージは、必ずしも吠えかかるというものではない。それで、魁はヒグマと対峙してもワンワンとは吠えないのだが、仮に通常の犬が同じ状態でうるさく吠えかかった場合、ヒグマの興奮度は高まり、次に起こす行動も異なると思われる。』

『　通常の家庭犬をやむを得ずベアカントリーに連れて入る場合は、最低でもその犬を飼い主がしっかり制御できることが必要だが、はじめてヒグマを近くに置いた犬がどのような行動をとるかを考えると、決してリードは放さないことだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５４薮に潜むヒグマ側の戦略）

岩井基樹は、 薮に潜むヒグマ側の戦略について、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　経験豊富なオス成獣などでは、ヒトを警戒していったん薮に潜むという戦略をとる。このような場合、オス成獣は本当に手が届くくらいまで動かない。これは、そのクマが何百回も潜む戦略をヒトに対して用いてきた結果、「ヒトは鈍感だから、こうして隠れれば大丈夫」と学習し、それを年々強化させてきたからだ。』

『　したがって、大型のオス成獣は自信と確信を持って潜む戦略を用いる。』

『　ヒグマの潜んでいる可能性のある薮の周辺で、私たちヒトは、トリッキーな動きをしないということが肝心だ。例えば、急に止まる・進路を変えるという種類のこと。具体的には、しゃがんで靴紐を結んだり、ヤマブドウやクマイチゴに駆け寄って手を伸ばしたり、立ち小便をしたり、そういう種類の行動だ。靴紐がほどけていても、ここなら大丈夫という場所まで進んでから結ぶようにしよう。（岩井國臣のコメント：私たち一般の人間には、ヒグマの潜んでいる可能性のある薮というものがどんな薮なのかよく判らないので、どんな薮でもトリッキーな動きをしないで、ともかく、ゆうゆうと遠ざかることに心がけたい。）』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５５登山道の歩き方）

岩井基樹は、 登山道の歩き方について、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　山塊を伝う登山道は歩きやすいために、部分的に熊道（くまみち）となっていることが多い。北大雪では、時期によっては特定のヒグマが登山道を常用しているふしがある。チシマザサのブッシュやコケモモが敷かれたハイマツ林を突っ切るいかにもヒグマ好きのするルートもあり、実際にヒグマの痕跡は多く見られるが、そのわりに登山者がヒグマと近距離で遭遇することはほとんどない。』

『　登山者の利用がそこそこあれば、その周辺に暮らすヒグマの多くは登山者と登山道をちゃんと学習している。ゴミを捨てたりする不届き者がいると、おかしな学習をしてヒトと食糧を関連づけて覚えてしまうこともあるだろうが、そうでなければそこのヒグマは、ヒトが登山道を歩くことを十分知っている。』

『　あくまで通常の登山道をゆっくり歩く。これがヒグマの生息地での安全な登山の方法だ。』

『　平山尾根への登山道に、何度訪れてもヒトに会わずクマに会え、ヒトの新しい痕跡はほとんど見られないのにクマの糞が多く転がっているルートがある。とは言っても、登山ガイド本には記載を見たことがない。果たしてこれを普通に登山道と表現していいかは疑問が残る。私の大好きな登山ルートだが。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５６薮を遠ざかる時）

薮にはヒグマが潜んでいることが多いので、薮を通り過ぎときには、ともかくゆうゆうとゆっくりあることが大事で、トリッキーな動きは厳に慎まなければならない。これは当然のこととして、その他にも、薮を遠ざかる時にも留意すべき点があるという。 岩井基樹は、 そのことについて、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　音を出してヒトの接近を知らせることに成功し、仮に道ばたのササ薮に潜んだヒグマがいたとする。その場合、こちらは、まず、その若グマが止まった位置をササの音からおよそ判断し、潜んだ若グマのの動きに一応注意を払いつつ、再び声と拍手で音を立てながらそこを通り過ぎる。この場合の音は、もちろん威嚇方向ではなく、単にこちらの位置を若グマに知らせるアッピール・合図としてだ。だから、「ほーほい、パチパチ！」でもいいし、ある程度大きな声でぺちゃくちゃ喋りながらでも、鼻歌交じりに歩いても、ともかく音を分かりやすくたてて立ち去ってやればいい。こうすることで、潜んだ若グマは、遠ざかるヒトの位置をより確かに感ずることができ、安心するのだ。気持ちとしては、遭遇前に「お邪魔しますよ」であったのと同様、立ち去るときは「おどろかせて、すまんかったね」という感じでいい。これが、若グマの意図しない不意の接近であれば、ここから若グマが迫ってきたり、襲ってくるというようなことはまずないだろう。』

『　理由が何にせよ、意図的にヒトに接近してくる若グマに対してはさまざまな手法で断固とした態度で臨むのが私の日常の暮らし方であり、意図的に行う若グマの忌避教育だが、逆に、逃げて潜んだりする若グマに「逃げてヒトから遠ざかれば大丈夫なんだ」と学習させるのも同じくらい大事な忌避教育なのだ。つまり、そのように学習を強化させた若グマ・ヒグマは、切迫しときに攻撃側ではなく逃亡側へスイッチが入る性質が強くなる。また、ヒトの接近で咄嗟に薮に潜むのではなく、余裕で遠ざかってからおとなしくヒトをやり過ごす傾向が強まるかもしれない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５７複数での行動）

集団で登山するときは、６～７人のグループ事にパーティーを分けて行動するのいいらしい。つまり、それがベアカントリーでの登山のあり方ということ。 岩井基樹は、 そのことについて、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　複数で行動すれば自然に騒がしくなりやすく、ヒグマとのバッタリ遭遇は概して少なくでき、仮に出逢ったとしても、単独行動と比べ、心理的も物理的にも、はるかに有利だ。実際に、４人以上の集団に本攻撃を仕掛けるヒグマは非常に稀だ。ベアカントリーを歩く理想的な人数は６～７人程度だろう。この人数は、まず、曲がりくねった道などで潜んだヒグマを多人数で取り囲まないための人数であり、また、もし何かあった場合に速やかにコンパクトにまとまれる人数でもある。よって、仮に理想的な７人で歩くとしても、全体が離ればなれにならないように歩くことが肝心だ。』

『　だから、４０人なら８人×5グループくらいに分かれて、それぞれのグループにリーだーとしてヒグマに精通したエキスパートを置き、そのリーダーの判断の基で８人が動くようにするのが理想だ。グループ同士は５０m前後離れて歩けばいいだろう。もし、エキスパートが5人揃わないときは、最低でも、最前グループと最後グループにエキスパートを置き、全体をコントロールするようにする。（岩井國臣のコメント：現在北海道にはヒグマに精通したエキスパートが少なすぎるように思う。もっとヒグマに精通したエキスパートが増えれば、北海道の人びとは、近くのベアカントリーで、ほんまものの自然に融け込んだ真に豊かな人生を送ることができるだろう。私はそのことを心から期待している。ヒグマの生息する北海道の山は自然豊かな宝の山だ。）』

『　ベアカントリーを歩くときの配列同様、野営をする場合などでも、ベアカントリーに適した配置がある。この場合は、歩くときとは逆に、それなりにコンパクトにテント場を定め、隙を与えないように心がける。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５８ヒグマの痕跡を見つけるコツ）

ヒグマの痕跡というのは、さまざまなヒグマの情報を与えてくれる。したがって、五感をフルに使って、ヒグマのサインを見落とさないようにすることがベアカントリーでの歩き方らしいが、そのことについて、 岩井基樹は、 著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマには、いわゆるなわばり、テリトリーは存在しないが、山で暮らす中で自然にいろいろな痕跡が残される。その時期の山菜食いなどで阿多らしい痕跡が残っている場合は、特に周囲に注意を払い、不用意な行動は禁物だ。ただし、ヒグマの痕跡があったからといって、それだけで撤退する必要はもちろんない。

『　ヒトはだいたい視覚に頼り、それにときどき聴覚が加わる程度だ。意外と重要なのが嗅覚。匂いとは空気中に漂う分子なので、空気の流れ、つまり風が常に重要となる。』

『　特に初夏の山では、軽やかに吹く風が次々にいろいろな匂いを運ぶ。風の呼吸によって定期的に運んでくる植物の香りの他、にわかに吹いた風が獣の臭いを運んでくることもあるだろう。フキの群生地などでは、ただ目をつぶって風を嗅ぐだけで、ヒグマの食痕の存在を感知できる場合があるが、香りの強い植物を何者かが噛んだ跡を吹く風は、その匂いをかなり遠くまで運んでくれることがある。』

『　どういうベアカントリーの風がどちら方向から吹いているのか、これは周辺を知る重要な手がかりである。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その５９釣り上がり）

知床にテッパンベツという小河川がある。岩井基樹は、まだ北大の学生の頃、そのテッパンベツに降海型のオショロコマを釣りに行ったことがあるらしい。ドリーヴァーデンは北海道でも５０cm以上の大きなオショロコマのことだが、それを釣りに行ったという訳だ。川周りをうろついていると、遠くに一頭の小型のヒグマが川に入っていて、浅瀬でサーモンを押さえて獲るときの独特のタックル動作を行っていたらしい。その際の彼の経験だが、その時期はサーモンの遡上する時期ではなかったので、彼は、てっきりドリーヴァーデンだと思ったらしい。そのクマは若グマだったらしいが、しばらくしてその若グマはドリーを諦めたか、何も銜（くわ）えず川からあがってどこかに消えた。ということは・・・・「ドリーは頂きだ」と彼は思い、意気込んで、偏光グラスで川を注意深く見ながらテッペンベツを遡行したという。クマは上流から下流に向けてタックルを行っていたので、ドリーが逃げたとすれば下流側。ところが、いくら丹念に探してもドリーは見つからなかったという。実は、サケもドリーもいない川で若グマは大暴れして遊んでいたということで、岩井基樹は、若グマのおそ日の一端を知りうる貴重な体験をした。そのような体験が元になって、「釣り上がり」ということを言い出した。 その 「釣り上がり」につ

いて、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　私は渓流の釣りを覚えた長良川筋の郡上周辺では、人の上流に入ることを「頭を叩く」と表現し、非常に嫌われる行為だが、ベアカントリーにおいて、少なくとも開けた本流以外では、ヒグマの観点から「釣り上がり」を推奨したい。』

『　例えば、渓流を上流へ遡行していて急に濁りが出たり古い落ち葉が流れてきたりしたら、可能性は二つある。源流域で降ったスコールによる鉄砲水の前兆か、さもなくば上流域にいる大型動物の存在。大型動物というのは、北海道の場合、他の釣り人かシカかヒグマだが、ヒグマが川の中で暴れ回って遊んだり、岩をひっくり返したりすることがよくあることなので、それを想定することができる。」

『　つまり、河川を上流に向かって移動している場合、川の流れが、これから向かう上流域の情報をもたらしてくれる部分がある。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６０ヒグマの爪痕）

ベアカントリーでは、樹の幹に残されたヒグマの爪痕をよく見かける。その樹の幹に残されたヒグマの爪痕について、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　はじめて訪れるエリアのヒグマの活動状況を把握するのに、四季を問わず可能な方法が、樹の幹に残されたヒグマの爪痕をチェックする方法だ。糞や食痕・足跡なら次の年には消えてしまうが、爪痕は残る。それらしい林道にちょっと入り、林道脇のトドマツなどに付けられた阿多らしめの跡を見て歩くと、「クマが多いなあ」とか「あまりいないのかな」とか、だいたい推測できる。トドマツ以外にもヒグマはさまざまな樹に登るが、樹皮の関係上、爪痕が遠くからでもはっきり分かりやすいのがトドマツだ。同じくツルッとした樹皮でも、ダケカンバなどは意外と分かりづらい。爪痕のつく樹の直径はだいたい２０～５０cm。枝振りなどは関係ないようだが、等高線に沿ったように斜面を登る林道・作業道では、なぜか道の斜面の下方向に圧倒的に多い。どうやら、ヒグマは斜面の樹には山側から登ることが多い。』

『　ヒグマが樹に爪痕を残す理由は、概ね四つある。実・キノコを食べるため樹に登る場合。遊びで比較的小型のヒグマが樹に登る場合。背中をこすりつける行動とともに高い位

置に爪痕を付ける場合。樹皮の内側の樹液をなめたり、樹皮を食べたりする場合。この四ケースだ。』

・・・と。

熊のことは熊に訊け（その６１熊道くまみち）

一口に熊道（くまみち）といっても、なかなか複雑な点があるらしく、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、熊道（くまみち）について詳しく述べている。すなわち、

『　野生動物の通る道のことを獣道（けものみち）というが、シカが通ればシカ道、クマが通ればクマ道などと単純に呼ぶ。私の場合は「羆（ひぐま）」という字を当てて羆道で「くまみち」と呼んでいる。』

『　通常は、単にヒグマが通った跡をクマ道といっているが、多くの場合、偶然そこを通っただけで、これは道というより通り跡だ。』

『　同じ個体、もしくは異なる個体が何年もそのルートを用いることで地面の形状や植生が変化したりする道がある。これを「真性の羆道」と呼んでいる。要するに、お決まりのルートだ。真性はエサ場周辺にできにくく、単調なルートにできやすい。』

『　獣道というと鬱蒼としたブッシュの中をたどる細々とした道を想像するかも知れないが、羆は登山道はもちろん、人間が山の樹の伐採のために作った林道・作業道、あるいは山上農地へ続くアスファルト張りの道でさえ、ごく普通に移動経路として流用し、山と人里を結ぶために作られた林道本線は、決まった時期に人里に遠征をかけて来る大型オスの恒例ルートになっていることも多い。また、季節に応じたシカ道を、ヒグマが気分で流用していることも珍しいことではない。』

『　真性だから危ないとか真性でないからどうだとか、危険度の点でそういう差異はほとんどないが、例えば８月以降のデントコーン農地周辺にこの真性の羆道が発見できれば、それは農地と近隣の山の行き来に毎日のように使われている通勤路みたいな道なので、日中であれば比較的近い山側のどこかにヒグマが潜んでいる可能性が非常に高く、早朝・夕刻であれば、バッタリ行き遇う率が高いだろう。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６２ヒグマの足跡）

非常に珍しいケースらしいが、 岩井基樹は面白いヒグマの足跡を撮っているのでまずそれを紹介したい。（「熊のことは熊に訊け」より）

http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/hiasiato.pdf

ヒグマの足跡については、この写真を見ていただければ詳しいことがよく理解できるが、実は、写真では説明できない微妙なものがあるらしい。その微妙な点について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、詳しく述べている。すなわち、

『　ヒグマの足跡については、実は写真を用いて説明できない微妙なものも多い。例えば、クルマ通りの少ない林道などで、２㎜程度までの砂礫からなる場合では、ある程度強い雨が降ると、無数の雨粒の衝撃でその砂礫が規則正しく微妙に浮く。だから、ヒグマや人がその上を歩くと、浮いた砂礫が乱れるのだ。この足跡などは、一つ一つを見ようとするのではなく、足跡列を意識して眺めると見えて来る。草地の場合なども、やはり微妙な乱れの列からヒグマの足跡であると、何となく判る場合がある。』

『　前掌幅（ぜんしょうふく）は、文字通り前足の手のひらの幅。』

『　体重の大きさ（頭胴長）と前掌幅の関係は一義的でなく、これまた「だいたい」という言い方しかできないが、前掌幅が１７㎝以上だと、なかなか大きいクマと認識できる程度。特に私は最近人里周りの若グマ専門なので、オスでも前掌幅は１６㎝前後までのものが多い。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６３ヒグマ「バッタリ遭遇」の場所と時間）

ヒグマと「バッタリ遭遇」しそうな場所と時間について、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　どしゃ降りの雨・強風・夕暮れ・濃霧など、あたりの状況が判りにくい時、我々同様ヒグマの側からも人間の存在を感知しづらくなるため、前もって人を避けることができず、ヒトとヒグマのバッタリ遭遇が起こりやすい。特に強風は厄介だ。また、渓流では水量・渓相によっては、もともと流れの音が大きく、地形によって局所的に音が伝わりにくい場所があることも覚えておこう。』

『　北海道では総じてヒグマが夜間に活動するように見えるのは、基本的にヒグマがヒトを避ける性質を持っているためだが、夕暮れ時・早朝は、いわばヒグマのエサ場への通勤・通学時間帯で、ヒトとヒグマの遭遇も必然的に多くなる。』

『　特に、「８～９月の山につながる柵のないデントコーン農地」という４条件が揃っていれば、高い確率でそこへヒグマが降りていることが推測できる。そのような農地を背負って川を遡行する場合などは十分用心して欲しい。デントコーン農地の常習グマは、日中でもさほど山奥へは帰らず近隣の薮や林に潜んで過ごすが、あるいはデントコーン農地の中で寝ている個体もある。場合によっては、一つの農地に数頭のヒグマが降りている。視界の利かないデントコーン農地を突っ切って横断するのは絶対に避けよう。』

『　同じ作物でも、農地にはヒグマが降りやすい農地と降りにくい農地がある。』

『　合理的経営センスで営まれている農地は、だいたいにおいて野生動物対策にもやはり合理性がある。自己防衛・自己責任としての防除意識が高く、障害となっている獣害たる野生動物の習性・特性をそれなりに理解し、ツボを押さえて一定のレベルで被害を防いでいる場合が多い。フェンスの設置の他、農地周辺の整備がなされ、薮が刈られて見通しが確保されているような場合には、ヒグマの降農地にストレスを与えることができている筈。逆に、農地周辺が整備されず薮がはびこり放題だったり、農地の中央に手入れのされない林が残されているような場合は、ヒグマの侵入ルート・潜む場所ともに多く、侵入ストレスがほとんど生じないのでヒグマが集中する傾向が強いばかりか、農地周りの薮がヒグマの生息地化してしまっているケースさえある。』

『　また、決して好ましいことではないが、現状としてはデントコーン農地裏の川沿いなどに、釣り人や観光客に配慮した注意喚起もなく箱罠が置かれるケースが多い。箱罠の中にはヒグマを誘引するためにシカ肉などが仕込まれるので、ますます周辺のヒグマがこの近辺に寄っている可能性が高い。人里や観光エリアに箱罠を置く危険性を特に強調しておきたい。』

『　ヒグマを十分遠ざけることのできるヒグマ用の電気柵はワイヤー感覚が２０㎝以内。特に最下段の高さが重要だ。基本タイプは２０－４０－６０㎝三段張りの電気柵。このヒグマ用の電気柵を設置し、メンテナンスを十分行えば、およそ１００％ヒグマを防ぐことができることが北海道自然環境課による防除試験で立証されている。』

『　電気柵のメンテナンスとは、概ね草による漏電。なので、下草が伸びて電流を流すワイヤーに触れているような電気柵は、じつはほとんど防除フェンスとして機能せず、むしろヒグマに掘り起こしを効果的に学習させてしまっている可能性が高い。ある農地でフェンスの下の掘り起こしを覚えたヒグマは、別の農地でも同じ手法で侵入を試みるので、実は、地域全体が電気柵による野生動物防除に失敗している可能性もある。つまり電気柵というのは、防除策ではあるが、実質は野生動物に対する教育ツールなのだ。地域が一丸になって行う教育。この重要な認識を欠いたまま電気策を導入すると、およそいい方向には行かない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６４ヒグマは人間をどう見ているか？）

ヒグマは人間をどう見ているか？　これはヒグマのことをその心理まで知り尽くした者でないと書けないが、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、ヒグマになった気になって、次のように書いている。すなわち、

『　ヒトというのは総じて我々ヒグマに対して臆病で、通常山で遭っても過度に恐れる必要はない。特に渓流で魚を捕っているヒトは危険度が小さいが、そのヒトの特徴は細くて長い棒で意味不明に振り回していることだ。この行為を見たければ、薮に隠れてこっそり見ること。間違ってもそのヒトに近づいてはいけない。同様に、我々の好きな新芽・山菜を採っている最中のヒトは危険性は小さい。驚かすことなくおおらかにその場所を譲ってやれば良い。仮にこれらのヒトに遭遇した場合は、よくヒトの様子を見ながら穏やかに立ち去ればまず問題は起こらない。ここでパニックに陥り彼らを打ち倒したりすれば、十倍の報復が待っていると思って良い。ヒトは仔グマであろうと容赦なく殺しにかかる。この地域に暮らすヒグマ全体の安全のために、そのような暴挙を犯してはならない。いずれにせよ、ヒトいうのは嗅覚がきわめて鈍感であり、我々ヒグマのほうで、なるべくヒトを察知し衝突を回避しなければならない。
　特にオレンジの衣服を着た銃を持つヒトの一部はきわめて凶暴かつ攻撃的で、見境なく我々を殺そうとするだろう。このタイプの異常性を持ったヒトにはあらゆる穏やかな回避法は通用しない。相手を確かめるために立ち上がるのも厳禁だ。速やかにササ薮に突っ込んで逃げるか、万が一それができなければ全力で突進し打ち倒すしか生きる方法はない。
　ただし、ヒトは知恵が高く、学習能力が高い。つまり、個体のばらつきが激しい。正常なヒトなら悶着・軋轢を回避する方法が残されている。つまり、「異常ヒト」をいかに正確に見極めるかどうかだ。マンカントリー周辺で我々ヒグマが暮らすコツである。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６５ヒグマ遭遇の４パターン）

 至近距離でヒグマと遭遇したとき、どう対応するか？　実は、至近距離での遭遇といっても４つのパターンがあり、そのパターンごとに対応の仕方が違うのだそうだ。そのへんのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　遇わないための戦略に失敗しバッタリ遭遇にまで進んでしまったら、無傷で何事も無くすれ違うための単純確実なマニュアルは存在しない。ただし、ヒグマという野生動物は「遇ってしまったらもう人生の終わり」という不運・不幸の動物でもない。』

『　特にバッタリ遭遇、至近距離遭遇の距離の定義はないが、、だいたい４０m以内だとかなり近いと感じるのではないだろうか。逆に、よほど不注意な行動をとっていない限り、２０m以内のバッタリ遭遇というのは起こりにくいと思う。』

『　a「バッタリ遭遇型」とは、お互いの不注意による意図なき遭遇。　b「潜み型」とは、潜み隠れるヒグマを不用意な動きで刺激するので、バッタリ遭遇より至近距離でしかも急展開する可能性が高い。　c「若グマ型」とは、若グマの好奇心による接近で執着度は低い。　d「餌付け型」とは、過去の経験・学習からヒトとエサを関連づけての接近であり、異常性があり危険度は大きい。ただし、通常はきわめて稀。』

『　aとbに関しては本人の注意でかなり危険度を低く抑えることができるが、c「若グマ型」のケースは、ヒグマ側からの能動的な接近であり、比較的たちはいいもののベアカントリーでは不可避な問題である。さらに、d、人為物を食べて学習した個体に関しては、これは遭遇する本人の問題というよりは、その地域のヒグマに対する意識とリスクマネジメントの問題である。』

『　ヒグマとの至近距離遭遇と一言でいっても、実は四つのパターンで対応の方向性が異なる。よく、ヒグマと遭遇した時にナタで反撃とか死んだ振りとか目を睨むとか単純にいわれることがあるが、ヒグマとの遭遇パターンを一切判断せず云々することは、じつはできない。また、仮にどのタイプの遭遇かが判ったとしても、これまで述べてきたようにヒグマそのものの個性・性格・気分がいろいろあるので、さらに臨機応変にことらの戦略を変えてやる必要がある。ただ、その判断や臨機応変がなかなか難しいので、通常、ヒグマ

の個性や遭遇タイプを無視した比較的画一的な確率論的マニュアルにならざるを得ないのだと思う。』

『　眼前にいるヒグマと、どのパターンで遭遇したのか瞬時に見極められれば越したことはないが、通常はなかなか難しい作業だろう。その場合、もっとも危険性が高く厄介な餌付けグマを念頭におきつつ、まず、バッタリ遭遇タイプの対応をとり、ヒグマ側の反応を確かめ、その反応に寄っては急遽和かグマタイプにシフトする。そういう臨機応変なやりとりが必要になる。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６６ヒグマ「バッタリ遭遇」の際の対応原則）

先述したように、至近距離遭遇には４っつのパターンがあるとして、岩井基樹の考えのポイントを紹介した。岩井基樹の考えのポイントは、『　眼前にいるヒグマと、どのパターンで遭遇したのか瞬時に見極められれば越したことはないが、通常はなかなか難しい作業だろう。その場合、もっとも危険性が高く厄介な餌付けグマを念頭におきつつ、まず、バッタリ遭遇タイプの対応をとり、ヒグマ側の反応を確かめ、その反応に寄っては急遽和かグマタイプにシフトする。そういう臨機応変なやりとりが必要になる。』というものであった。すなわち、最悪の状態が「バッタリ遭遇」ということだが、その「バッタリ遭遇」の際の対応の仕方について、 岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマと至近距離で遭遇すると、ヒトは大なり小なり動転しがちだが、むしろヒグマの側がびっくりし、切迫した心理になっていると思って欲しい。そして、まず自らの心理コントロールをしっかり行い、次いでヒグマの心理コントロールを行うことに心がけよう。』

『　バッタリ遭遇時の対応原則は、とにかく、切迫した眼前のヒグマに対して、いろいろな方法で「驚かせてすまない。敵意は全くない。ほらね。」と野生動物のやり方で表現するのが目指すべきところである。表現の一つとして「なだめる」という戦略、これは実際、ヒグマをなだめているのか自分をなだめているのか、かなり微妙なところだ。つまり、ヒグマと至近距離で遭遇し、顔面蒼白になって口一つ聞けないヒトの状態そのものがマズイのだ。自分がリラックスする意味でも柔らかく声を出してみるのは有効だろう。この意味で、発する言葉はまともに「驚かせて悪かったね」でもいいし、「今日は何曜日だったかな？」でも、また、ヒグマ側に聞こえないくらいのつぶやきでもいい。』

『　http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/higuikaku.jpg　をクリックして出て来る写真は、こちらに正対し下唇を伸ばして威嚇行動をとるヒグマだが、これは通常、警告に当たる行為だ。距離は確か４０mほどだったと思うが、この警告を見逃してヒト側がこのままここに居続け、特に睨んだり手を振ったりすると、次にはもっと激しい行動、突進や地払いに移る。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６７ヒグマが威嚇してきた時）

ヒグマとの「バッタリ遭遇」の際には先述の通り柔らかく声を出してこちらに敵意がないことを示すとヒグマが遠ざかることが多いようだが、それに失敗していよいよヒグマが立ち上がって威嚇してきた時には、その対応が難しいらしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　ヒグマが立ち上がって威嚇するのは、通常、至近距離に限り、この威嚇は本攻撃の一歩手前なので誰見ても判りやすい形で行われる。』

『　ヒグマは時速５０kmで走ることができ、ヒトが走って逃げ切れる相手では決してない。そもそも走るから追いかけるという心理が少なからずある。これは、食肉目（イヌ、ネコ、イタチ、クマなど）の動物のおよそ共通点だ。つまり、仮に走って逃げ切れるヒグマであれば、歩いても逃げ切れる。歩いて逃げ切れるヒグマであれば、通常、穏やかな後ずさりで、より安全に衝突を回避できる。』

『　ヒグマというのは、走って運で逃げ切れるほど甘くない。私自身は、至近距離で遭遇したヒグマから走って逃げる勇気はどうやっても湧いてこない。』

『　切迫し硬直しながらヒグマの眼を見ると、それは敵意・攻撃性と受け取られる可能性の方が高い。これも、恐らく食肉目の共通点だろう。バッタリ遭遇で切迫させたヒグマを見るときは、目を睨むのではなく、漫然と見るくらいが適切だ。具体的には、身体をヒグマに対して正対させると後方がまったく見えず、後ずさりも難しくなる。』

『　穏やかにゆっくりした口調で声を出せるなら、それも効果的だろう。音程は通常のままでよい。間違っても、獣の真似をして唸ったりしてはいけない。こちらがヒトであることを認識させつつ、相手に非敵意・非攻撃性を示すということだ。』

『　おおらかに語りかける＝なだめるは、クマに限らず言語の通じないあらゆる知的動物に当てはまる戦略だ。犬でも異邦人でも乳児でも、同じこと。』

『　ヒグマとバッタリ遭遇で穏やかに話しかける・なだめるという手法は、少しでも相手に向かって我々の側からも音による意思表示を行おうと言うものだが、敵意・攻撃性に誤解されないために低いうなり声とはできるだけ反対の喋り方にならなければならないし、逆に、無理に高い音程で声を出すと、別の意味でヒグマを刺激したり興味を引いたりする可能性がある。それで、しゃべる音程は意識的に変えず、自然に穏やかにゆっくり話すというスタンスになる。』

『　手を振るも腕を横に広げるも、至近距離では威嚇・挑発に受け取られかねない。腕はあくまで目立たぬよう下げたまま、過度に動かさないようにやりとりを行うのがいい。』

『　死んだ振りとは何なのか？　言葉や表情などで眼前のヒグマと巧くやりとりをできないケースで、確実に非敵意・非攻撃性を表現するもっとも簡単な方法なのだ。ただし、これは、ヒグマの攻撃が遭遇と同時に起こった場合だ。」

『　ちょっと非現実的であるが、同じ意味で、切迫し威嚇行動をとるヒグマの前で大あくびをしてもいいかも知れない。通常、野生動物の間であくびというのは攻撃・敵意・威嚇とは正反対の行動である。』

『　起こって至近距離から威嚇して来るヒグマの目の前で大あくびをできる人は、間違いなくベアカントリーのエキスパートだ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６８ヒグマ突進にそなえて）

ヒグマが立ち上がって威嚇してきた時には、先述のように、通常、穏やかに話しかけながら、身体を斜めに後ずさりをしていくのが良いらしいが、後ろに立ち樹があれば、ゆっくりその後ろに回り込むのがベストらしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　立ち樹があれば、その後ろに回り込むようにゆっくり後ずさりしながら移動する。万が一ヒグマが突進を開始したとき、立ち樹はそのスピードを止め、さらに、その後は盾として利用することができる。回り込む樹の直径は１５～２０cm程度が適当だろう。あまり太い樹だと、こちらからもヒグマの姿が見えず対応しにくい。特にベアスプレーを用いる場合には、立ち樹をたてにする戦略はきわめて合理的だ。こちらに突進してきているヒグマに「４ｍで当たるスプレーを噴射しましょう」と勧めても、現実的には、それはかなり困難な作業だ。立ち樹にうまく回り込めれば、止まったヒグマに２ｍ以内の距離からスプレーを噴射することも可能だ。』

『　また、適当な樹がない場合。穏やかな斜面なら、風向きを計算しつつできる限り上方へ移動し、少しでもヒグマを見下げる位置取りを心がけるようにする。』

『　樹に登るという戦略は、通常、バッタリ遭遇の場合はない。無理に樹に登ろうとしてヒグマに追いつかれれば、簡単に引きづり下ろされるに違いない。そうなれば、走って逃げているところを後ろから飛びかかれたのと同じ経過をたどる可能性が高いだろう。若グマなら、垂直に立つ枝ひとつもないトドマツの幹にツメをかけ、何の苦もなく駆け上ることができ、立ち上がったヒグマのツメが身体のどこかにガッチリかかったら、もはや人は抵抗する術を持たないだろう。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その６９ヒグマ「バッタリ遭遇」・グループ行動の場合）

先にグループ行動の有利な点について岩井基樹の考えを紹介した。彼は『　複数で行動すれば自然に騒がしくなりやすく、ヒグマとのバッタリ遭遇は概して少なくでき、仮に出逢ったとしても、単独行動と比べ、心理的も物理的にも、はるかに有利だ。実際に、４人以上の集団に本攻撃を仕掛けるヒグマは非常に稀だ。ベアカントリーを歩く理想的な人数は６～７人程度だろう。この人数は、まず、曲がりくねった道などで潜んだヒグマを多人数で取り囲まないための人数であり、また、もし何かあった場合に速やかにコンパクトにまとまれる人数でもある。よって、仮に理想的な７人で歩くとしても、全体が離ればなれにならないように歩くことが肝心だ。』と言っている。そこで私も４～７人のグループ行動をお勧めするのだが、その場合、そのグループには経験豊かなリーダーが存在することとそのリーダーのもとメンバーは勝手な行動をとらないということが大事である。これは私の京大山岳部で学んだことだ。山では如何にリーダーが大事か。ちょっと横道にそれるかも知れないが、私の山岳部の友人・松尾稔君がリーダーの重要性を語っているので、ベ

アカントリーでのグループ行動についての岩井基樹の考えを紹介する前に、松尾稔君の話を紹介しておきたい。
https://www.youtube.com/watch?v=pebArgmgfXw

さて、ベアカントリーにおけるグループ活動ではそのグループには経験豊かなリーダーが存在することとそのリーダーのもとメンバーは勝手な行動をとらないということが大事であり、そのことについての岩井基樹の考えを紹介しておこう。ベアカントリーにおけるグループ活動について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　集団で移動しているときだけでなく、ヒグマと遭遇してしまってからもできる限りコンパクトにまとまり、全員でヒグマに対峙するよう心がける。』

『　よくあるヒトの行動パターンは、我先にと走って逃げるというもの。勝手に銃をぶっ放す、これをアラスカではチキンというが、ベアカントリーで活動するときはできるだけチキンをパートナーに選ばないことが肝要加茂知れない。制御できないイヌがベアカントリーではトラブルの元になるが、リーダーの意向を無視して勝手な行動をとるチキンは半ば破滅の元である。信頼できるパートナーと行動を共にすれば、いかなる状況下でも連携しながら冷静に自分のポテンシャルを最大に発揮できるだろう。』

『　一人がパニクって逃げ出すと、パーティー全体に我先にという心理が伝染していまいがちだ。すると、それは既にパーティーの崩壊を意味するが、それでは連携も協力もなくただ個人個人が自らの保身を優先してわざわざパーティーの持つポテンシャルを放棄してしまっているようなものだ。本来、不測に事態を追いつめられたときにこそ、心強いパーティーが一致団結し全員が生還するという強い意志で全員が動けば、結果的に自分が助かる可能性も最大となるだろう。例えば、誰かが不意にヒグマの攻撃を受けるような状況に陥った場合、他のメンバーが樹の後ろに回り込んで怒鳴ったり過度な動きをしたりすることで、ヒグマの注意を引き、そのメンバーの怪我を最小限に抑えることも可能だ。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７０恐るべしキッズ・ベア）

親子連れのヒグマに遭遇したとき、仔熊の興味を削ぐために、まずは立ち枯れの樹のように飄然（ひょうぜん）と立って、立ったまま死んだ振りをしているしか術（すべ）がない

らしい。そのことについて、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　私が親子連れのヒグマに遇ってまず恐れるのは母グマではない。正常な母グマなら、決して自ら進んで悶着を起こしたがらないからだ。読める分だけまだ質（たち）がいい。では、何を恐れるか？　仔熊だ。』

『　親子連れのヒグマとつい遇うとする。その距離が３０mだとして、恐らく、母グマはこちらを気にしながら仔熊を誘導し、ゆっくり去ろうとするだろう。ところが、仔熊のうちひときわやんちゃな一頭がこちらに非常な興味を示す場合がある。』

『　仔熊が容赦なく近づいてベアスプレーの噴射距離に入ってきた場合、近づく仔熊に向けてスプレーを噴射しようものなら、母グマの本攻撃をまともに受けそうだ。この仔熊に対しては決して話しかけたりもできない。通常の対応のように後ずさりすると、その距離だけ詰めて近寄って来る仔熊さえある。結果、私が思うには、まずは立ち枯れの樹のように飄然（ひょうぜん）と立っているしか術（すべ）がない。立ったまま死んだ振りをしているような状況である。そして、仔熊の行動に最低限の気を配りながら、今度は母グマの行動・表情・心理に神経を集中させるだろう。もしベアスプレーの使用があるとすれば、それは母グマに対してだが、子を連れた母グマの攻撃にこのスプレーがどれほど有効に利くか、私自身はちょっと疑問だ。恐らくだが、通常のヒグマ遭遇でいわゆる撃退率９０％とかは、このケースでは発揮できないと感じている。』

『　スプレーを手にしながら私が死んだ振り戦略を持ち出すとすれば、この親子連れのケースだろう。』

『　私の経験でこれに似たケースはいくらかあるが、やんちゃな仔熊に噛まれ放題・引っかかれ放題という局面まで悪く進んだケースは今のところない。仮にそうなっても、まともな母グマなら、早い段階で止めてくれると期待している。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７１ベアスプレーとは？）

ヒグマ撃退用のベアスプレーはいろいろあるようだが、岩井基樹は、自分愛用のベアスプレーについて、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　私は、この１０年間、カウンターアソールトしか使っておらず、他の銘柄のベアスプレーの効果がわからない。』

『　有効成分の濃度・ガス圧などが銘柄により少しずつ異なり、同じ状況で同じ効果がヒグマに対して得られるとは、私には言いにくい。環境省あるいは北海道環境科学研究センターなどの公的機関で、各々のクマスプレーの成分分析、噴射性能なども公平にテストし公表してくれれば、もう少し突っ込んだことが言えるのだが。』

『　カウンターアソールトを開発したチームにチャールズ・ヨンケル、スティーブン・ヘレロ、キャリー・ハントという三人の専門家が含まれているが、偶然にも私は、ヒグマ用の電気柵の設置方法に関してヨンケル氏、北米のヒグマのあれこれについてヘレル氏、そしてベアドッグの育成に関してハント氏、この三人の意見や方法論をそれぞれ参考にし、三人とも信頼に足るヒグマ研究者だと感じている。それで今は、「彼らを信頼して」という賭けのような部分も少しはあるかも知れない。』

『　ここからしばらく、噴射距離や効果など少し緻密な話に及ぶため、一般用語のベアスプレーではなくカウンターアソールトを「CA」と表記し用いることを了解願いたい。』

『　「ゆっくり後ずさり」「穏やかになだめる」などで遭遇したヒグマとうまくすれ違えることができれば大成功だが、それができず、いよいよヒグマとの距離が縮まってきたときに有効なのがCAだ。ナタ、クワ、棒などでヒグマを退けた事例が北海道にはあり、それらの撃退法を前否定するものではないが、年齢・性別・体力・腕力・運動神経などに左右されず、すべての人にとって安定した効果が期待できるのがCAである。』

『　特に遭遇例の多い若グマに対しては、CAの撃退率は非常に高いが、逆に、手負いグマ、６月の交尾期のオス、シカにつくヒグマ、（人為物で）餌付けされたクマなどに対しては撃退率が相応に下がると考えられる。したがって、CAも安心して依存すべき道具では決してないだろう。』

『　私はCAをもっとも使い慣れている一人だと思うが、それでも、このスプレーを吹くときは「利け！」と念をクマに投げつけるような気持ちで噴射のトリガーを押す。そして、やはり一歩二歩踏み出す感じで眼光や態度で眼前のヒグマを威圧するようにこのスプレーを吹く。つまり、このスプレーさえヒグマの顔に噴射すれば大丈夫、というまでの信頼感は持っていない。』

『　スプレーというと、無意識にヘアスプレーや殺虫スプレーをイメージするだろうが、クマ撃退用のスプレーはどれも日常的なスプレーとはまったく別物だと考えて欲しい。どちらかというと小型の消火器に近い。』

『　理想的には山奥へでもいって実際に吹いてみて噴射の反動や勢いなどの感触をつかむといいが、なかなか高価なスプレーなのでそう易々と練習用にしてしまうこともできない。』

『　イシンを抜いた練習用のスプレーがあるらしいが、もし日本で市販されていればそれを使ってテスト吹きしておくのがいいかも知れない。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７２ベアスプレー使用時の注意）

ベアスプレー使用時の注意について、岩井基樹は、著書「熊のことは熊に訊け」（２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　山では無風に見えても微妙に空気が流れていることが多いが、完全な無風であったとしても、ベアスプレーを噴射すれば大なり小なり自分自身がダメージを負うと考えておいて欲しい。向かい風で噴射すれば間違いなく自らがダメージを負い、ヒグマのやりとりどころの話では無くなる。具体的には、眼が開けられなくなり、ひどければ呼吸困難に陥るかも知れない。この理由もあって、私は常に風向きに注意する癖に加え、ヒグマと遭遇した際も、できるだけ風上に回り込むように意識が働く。万が一、このスプレーを浴びてしまった場合には、とにかく水を探し眼や喉を洗浄すること。』

『　強風は音と匂いをヒグマが感知しづらくなるので、ヒトとヒグマの遭遇が起きやすい状況を生む。強風下ではまず普段以上に、恥ずかしいくらい過度にヒトのアピールを行いながら移動するのが肝心だ。それでも近距離で遭遇し近づいてくるおかしなヒグマに対しては、ナタの利用もあり得る思う。』

『　CAの実際の使用に当たって注意すべきは、総噴射時間が５～８秒程度と効果的な噴射距離は４m以内という二点。取扱説明書では噴射距離１０m内外と書かれているかも知れないが、有効成分の到達距離と実際に効果を十分発揮する射程距離とは異なる。あくまで後者で考えて欲しい。つまり、ヒグマが４mという射程に入ってくるまで構えたまま噴射しないという冷静さと勇気が必要だ。動転して１０mで噴射してしまえば、肝心な距離でガス欠になるのがおちだ。』

『　これは、もちろん一般の方に推奨できることではないが、特に若グマのゆっくりした接近の場合、私はCAの「二段吹き」というのをやっている。一段目は、風の種類にもよ

るが、５～７m前後からほんの一瞬。これは、ヒグマの撃退できるほど威力を持たないが、ファジーにでもヒグマの顔に命中すれば、それなりの刺激を与えることはできる。つまり、ヒグマの類推能力に働きかけるひと吹きである。二段目は、３m前後からの噴射。私が若グマ相手にCAを二本持つのはこのため。このスプレーは指を通す部分があって、ロックを外してそこに人差し指をかけて両手に持つと、仮に片手を添えて両腕で吹くとしても、一本目と二本目をほとんど間髪入れず吹くことができる。』

『　CAの射程に入る手前でほんのひと吹きするだけで、若グマは慌てて退散することが多い。そして、少し離れた場所まで逃げてからこちらを振り返り、「何だよ、今のは？」みたいな表情でこちらを確認し、そのまま立ち去る。少なくともこれまでのケースからいえば、概ねこの進み方をする。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７３「死んだ振り」）

先に、『　死んだ振りとは何なのか？　言葉や表情などで眼前のヒグマと巧くやりとりをできないケースで、確実に非敵意・非攻撃性を表現するもっとも簡単な方法なのだ。ただし、これは、ヒグマの攻撃が遭遇と同時に起こった場合だ。』と岩井基樹が言っているのを紹介したが、うつ伏せ防御などの「死んだ振り」は合理的な防御法だとして、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　指を組み首筋から後頭部を抱えて、うつ伏せに寝ころぶ方法。ヒグマに簡単に転がされないように足を適度に開き身体を安定させる。仮に転がされても、仰向けに止まらないように、そのままもとの姿勢をとるようにする。ザック、帽子などを身につけているものはそのまま。この戦略は、ヒグマと遇って即行うのではなく、攻撃を受けたとき、またはその直前に最後の戦略として行う。ただし、いったんこの戦略に持ち込んだら、ちょっとツメをかけられたり牙を立てられたりしても、動いたり、声を出したりしてはいけない。正常なヒグマであれば接触が延々と続くことはないが、この段階まで進んでしまったら、多少の怪我は覚悟するしかないだろう。脚やケツを噛まれるくらいは安い授業料だと思うしかない。』

『　また、ヒグマが立ち去っても、しばらくはその体勢のまま動かずにいること。最低１０分程度はそのように過ごし、最小限の動きでそっとあたりの様子をうかがいヒグマが本当に去ったかどうかをよく確認してから、ゆっくりした動作で起き上がる。死んだ振りが

成功したヒグマが立ち去ったところ、慌てて動いたためにヒグマがそれに気づき、Uターンして攻撃を激化させ死亡事故につながったケースもある。』

『　うつ伏せ防御の他に、同じ趣旨のアルマジロという防御姿勢がある。アルマジロというのはファジーにご存知の方も多いと思うが、要するに、でかいダンゴムシのような生き物だ。外敵に攻撃されそうになるとダンゴムシのように丸くなり、固い甲冑のような背中で防御する。ヒトの場合、硬い背中は持たないが、山ではザックを背負っていることが多いので、この方法がそこそこ合理的戦略として浮上する。腕で固く膝を抱え、丸くなって横になる。ただそれだけだ。この防御姿勢については、私は無知で何とも言い難いが、バタバタ暴れてヒグマを興奮させ手や足を執拗に噛まれるよりは、はるかにいいように思う。首から後頭部・側頭部にかけて急所が丸出しになるが、もし攻撃・物色などを受けたとしても、肩・腕・腿などへのダメージですむ可能性が高いように思われる。』

『　ベアカントリーに限らず山に入るときは、怪我に対しての最低の応急手当を覚えておく。ヒグマ相手に私が念頭に置いているのは即死に至る致命傷の他に、「どこを攻撃された場合に止血ができないか」という点。具体的には肩から上、頸動脈や頭部への攻撃は防ぎたい。そこそこ山奥でも、止血をしっかりでき、冷静に気持ちを強く持てば、万が一ヒグマの攻撃を受けても助かる可能性が十分高い。』

・・・と。

目次に戻る！

## 熊のことは熊に訊け（その７４鉈＜なた＞について）

鉈（なた）というのは、ベアカントリーに限らず、山では必携のものだが、その鉈（なた）をヒグマの撃退用に使うことは、岩井基樹の場合、ほとんどないらしい。しかし、彼は、なかなかいい鉈を持っていて、それを携えベアカントリーを歩き回っている。その鉈について、岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の中で、次のように述べている。すなわち、

『　私が持つ若グマ教育セットというのは、基本的にCA（ベアスプレー）二本と轟音玉数発、そして鉈を下げた作業用ベルトだ。』

『　私も山に鉈を携帯するのが普通だが、これは、なにも対ヒグマ護身用という訳で七区、山でいろいろな作業を行うための道具の意味合いが強い。以前、といっても相当前になるが、ヒグマ対策用の鉈の重さや形状・材質に随分こだわって持ち歩いていた時期がある。ヒッコリーの柄でダブルハンドの剣鉈を作って、仰々しくそれをかついで山を歩いていたこともある。それらの攻撃用の鉈は、いまもどこかにあるが、博物館の遺物と同じで

ほとんど手にすることはない。その後、いろいろ経験し学ぶうちに、ヒグマ対策＝鉈という考えが薄らいでいくとともに鉈は小型化し、今は特別限られた状況でしかヒグマに対しては使う感じがしない。』

『　私が現在ヒグマ対策として鉈をあまり勧めないのは、先述の「複数で行動し、ヒグマ遭遇時にはコンパクトにまとまる」という戦略があるからでもある。ただでさえ自傷の危険性の高い鉈だが、コンパクトにグループがまとまった状態で、パニックかそれ寸前の状態の人がそれぞれ鉈を振り回したらどれくらい危険かは想像に難くないだろう。』

『　鉈をヒグマに使う際は、殺してやろう、倒してやろうではなく、あくまで痛い思いをさせて追い払うのが目的なので、ぶんぶん振り回すのではなく、コンパクトに扱い、もっとも当てやすく効果的な場所、例えば鼻周辺にしっかり当てるのが効果的だろう。』

『　いずれにしても、鉈類を本気で護身に使うつもりなら、鉈を扱える最低限の筋力をつけ、かつ常日頃から十分使い慣れておくことが必要条件となる。仮に持つとしても、鉈というのは、やはり現在ではCA（ベアスプレー）が利かなかったときの最終手段という位置づけで考えていいと思う。例えば、CA（ベアスプレー）の射程が仮に３mだとしても、鉈の振るえる距離の３倍ほどはある。つまり、CA（ベアスプレー）の方が接近戦にならずにヒグマを撃退できる可能性も持っている。したがって、両方持っている場合は、初手にCA（ベアスプレー）。二の手に鉈という順序になるのは当然の理屈でもある。』

・・・と。

目次に戻る！

熊のことは熊に訊け（その７５エピローグ「遥かなる共生を目指して」）

岩井基樹は、著書「 熊のことは熊に訊け」（ ２０１０年、つり人社）の最後に、北海道の山が真に自然豊かな山であることを願い、ヒグマとの共生を願いながら、次のように述べている。すなわち、

『　本書では、ヒグマとの遭遇対処を、かなり思い想定を含めて最終章に持ってきたので、読者はヒグマの危険性について誤認しないように十分注意していただきたい。餌付けされていないヒグマがヒトとのバッタリ遭遇でreal chargeを行う例は、むしろ稀といえるし、間違った行動をとりさえしなければ皆無というレベルにある。それは数百度のヒグマとの至近距離遭遇を経てなお生き残っている私の存在が一種のプルーフであり、私の調査エリアで頻発するヒグマの目撃・遭遇・ニアミスにもかかわらず、これまで一度たりともヒグマによる人身事故が起きていないのも、ヒグマの非攻撃性を示す事実だろう。』

『　再確認するが、ヒグマというのは悪魔でもモンスターでもエイリアンでもない。強獣であり、ときどき強面で荒々しいbluff chargeを見せるが、我々ヒトと同じく、お日さまの元で、この地球という惑星が育んできたかなり穏やかな乗組員の一人なのだ。ほとんどのヒグマは、ごくごく普通のキツネやフクロウやユキウサギと同じ、ただ山に暮らす野生動物。だから、「遭遇したらもうおしまい。神様たすけてえ」という相手でもなければ、「殺るか、殺られるか」という相手でも決してない。だからといって無知のまま横柄傲慢に何をやっても大丈夫という動物でもない。』

『　北海道では、概してヒトはヒグマに対して過敏に反応する。この反応は鋭敏というよりは、明らかに過敏だ。知識・認識の欠如ゆえに過度に恐れ、過度に敵意を燃やす訳だが、的外れなことがほとんどだ。現在のヒトの暮らしの状況を冷静に見ていると、ヒトは「クアが危険だ」「害獣だ」とうるさいほどに仰々しく言いつつ、じつはほとんどヒグマを恐れず軽視しているのではないかとさえ思える。農地へ誘引され依存しながら神経質に振る舞うというちょっとアンバランスな状態が北海道のヒグマにはあるが、我々の暮らす意識を変えてバランスを整えていくことも必要、いや、何より先決だ。』

『　訪れる者の戦略、暮らす者の戦略が共に適ったものとなれば、ヒグマの問題というのは、人が容認できるレベルまで十分小さくできる。これを呼んでいただいた方々の実践でその半分を立証してもらいつつ、ベアカントリーを大いに楽しんでもらい、山や河の素晴らしさとともにそれを普及していってもらえたらと私は期待する。』

『　ようこそ、羆の棲む森へ。』

・・・と。

目次に戻る！